社会教育課 2

文化財保護課

鶴谷遺跡群

前橋総合運動公園事業地区内
埋蔵文化財発掘調査概報

1980年
前橋市教育委員会

序

昭和58年度に開催される「あかぎ国体」にむけて、県内各地でその準備がすすめられています。

ここで報告します鶴谷遺跡群が所在する地域も、テニス会場が予定され、テニスコートをはじめとする各種スポーツ施設を併設した前橋総合運動公園として造成されることになり、文化財保護の立場から、第一次調査を実施いたしました。

調査の結果は、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居を中心とした先人の生活の跡が発見され、私たちの祖先の生活や生産の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。ここに、その成果の一端を報告します。

この調査を実施するにあたり、終始ご協力いただいた都市計画部公園緑地課の方々及び酷暑の中で直接調査に携わっていただいた作業員の方々に対して厚くお礼を申し上げます。

本調査報告書が地域の歴史解明の一助として活用されれば幸甚であります。

昭和56年３月31日

前橋市教育委員会
教育長　金　井　博　之

例　　言

1. 本報告書は、前橋市荒口町に所在する鶴谷遺跡群の昭和55年度発掘調査の概要である。
2. 調査主体者は、前橋市教育委員会である。
3. 発掘調査の要項

調査場所	前橋市荒口町下鶴谷1465番地以下5筆他169筆
調査期間	昭和55年７月１日～昭和56年１月10日
発掘担当者	松本浩一、福田紀雄、木部日出雄、池田茂則 田口正美

4. 報告書の作成は、調査にあたった担当者の共同討議に基づいて分担執筆したものである。
5. 報告書の中で用いる方位Ｎは、磁北を示す。
6. 報告書の中で用いる遺構の記号は、Ｈ－土師器を伴出する竪穴住居跡、Ｐ－ピット、ＪＰ－縄文時代のピットである。
7. 本発掘調査における出土遺物は、一括して前橋市教育委員会で整理保管している。
8. なお、本発掘調査にあたっては、大勢の発掘作業員、整理員の協力をいただいた。

目　　次

序

Ⅰ．発掘調査に至る経過……2

Ⅱ．発掘調査の経過……2

Ⅲ．遺跡の位置と環境……2

Ⅳ．発掘調査の経過と概要……4

1．範囲確認調査……4

(1)　表面採集調査……4

(2)　試掘調査……5

2．遺構調査の概要……6

(1)　地　層……6

(2)　検出遺構……折込み

3．出土遺物
……15

Ⅴ．まとめ……24

I　発掘調査に至る経過

前橋総合運動公園事業に伴う埋蔵文化財について、前橋市教育委員会と公園緑地課との事前の調整、協議の経過及び結果の概要については、下記のとおりである。

昭和54年10月

県文化財保護課の行政指導として、埋蔵文化財について、前橋市教育委員会が主体となり、調査対象とするよう指導を受ける。

昭和54年10月

前橋総合運動公園事業予定地全域（22.3ha）に対して、遺構・遺物の散布状況および地層調査を行う。

昭和55年１月

教育委員会と公園緑地課との協議により文化庁へ補助金申請をし、発掘調査をすることになった。

昭和55年６月

教育委員会社会教育課より公園緑地課へ「調査の円滑なる推進のための協力依頼」を行った。

II　発掘調査の経過

昭和55年７月１日～昭和56年１月10日

対象地域内の遺跡の範囲確認調査と一部区域の発掘調査を実施した。

(1)　運動公園事業55年度造成予定地（テニス・コート及び進入道路部分）に対して、2m×16mトレンチを20m間隔で入れる。その結果、遺跡の分布範囲・性格等についての概要を確認できた。

(2)　(1)のトレンチ調査によって遺構が確認された地域（約1.2ha）について発掘調査を実施した。

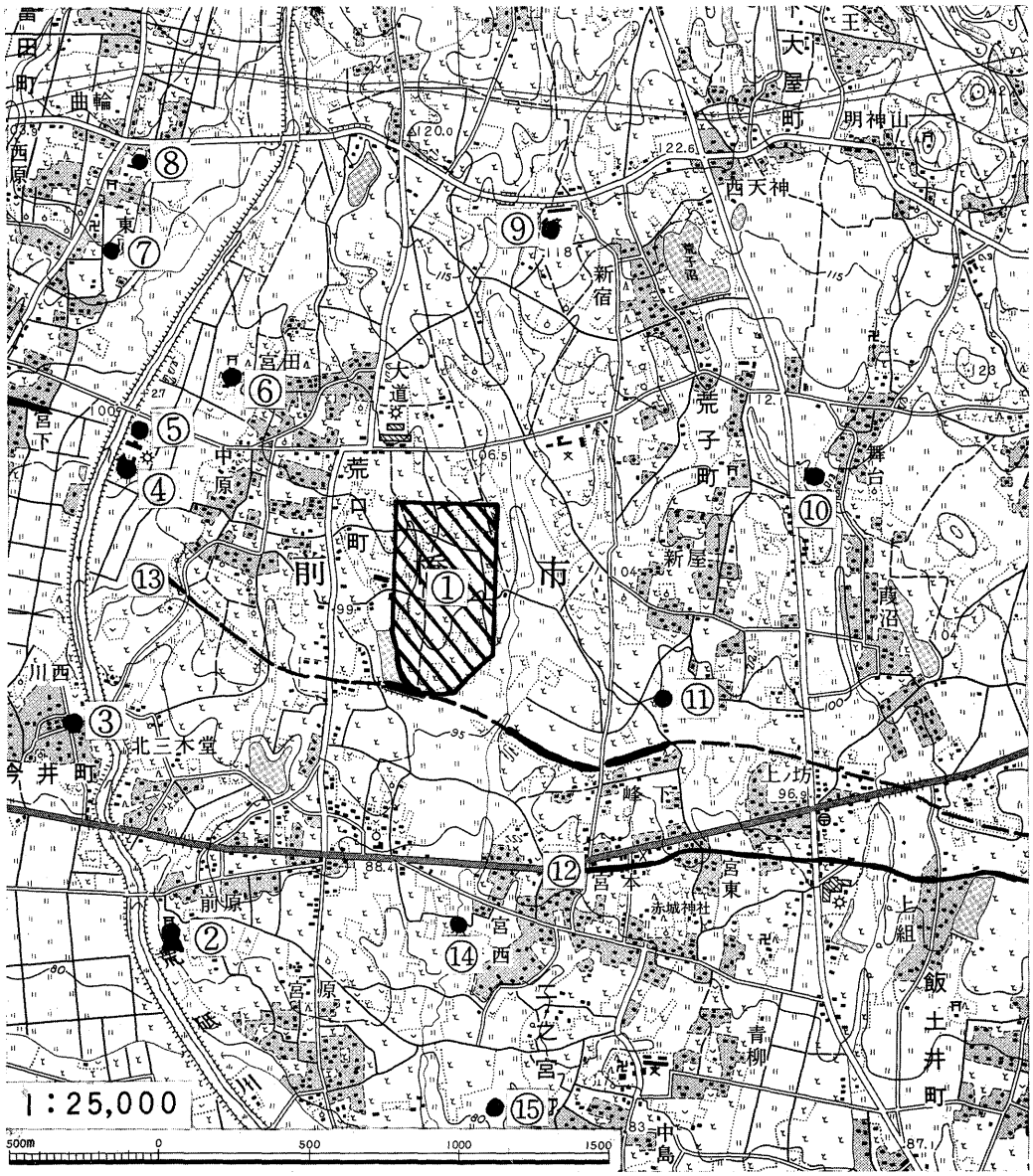
(3)　運動公園事業56年度以降造成予定地全域に対して、トレンチ方式による試掘調査を行い、遺跡の分布範囲・性格等についての概要を確認できた。

III　遺跡の位置と環境

鶴谷遺跡群は、前橋市荒口町に所在する。遺跡は赤城山南麓の末端にあたり、東西を荒砥川と西神沢川に挾まれた台地上にある。遺跡地のほぼ中央を100ｍの等高線が東西に走る山麓末端の台地であるが、遺構は台地頂上部にはほとんどなく、東及び南側斜面に集中する傾向がある。赤城山南麓には、大小さまざまな、ため池が数多く存在するが、鶴谷沼は、本遺跡地に西隣し、近くには、今井沼、北原沼、荒子沼等比較的大きな、ため池がみえる。

本遺跡地の所在する城南地区は以前から縄文土器・土師器・須恵器および古墳の一大散布地として周知されている。本遺跡の表面採集においても、発掘予定地からは、縄文時代前期の土器片をはじめ、古墳時代から奈良・平安時代に至るまでの土器片が多く確認された。また遺跡地南端水田地域には、地割として帯状に「女堀」が残り、更に南約500ｍのところを東西に走る小径は「東道（あずまみち）」と言われ、古代の道「東山道」と推定されている。周辺の遺跡としては、新屋で石田川式土器を伴う住居跡の発掘調査が行われているのをはじめとして、前田、諏訪西、富田、荒子小学校校庭等の各遺跡地で土師器および須恵器伴出の住居跡が調査されている。

以上のように本遺跡地付近は、古代より集落が営まれていたことが部分的には、明らかにされている。



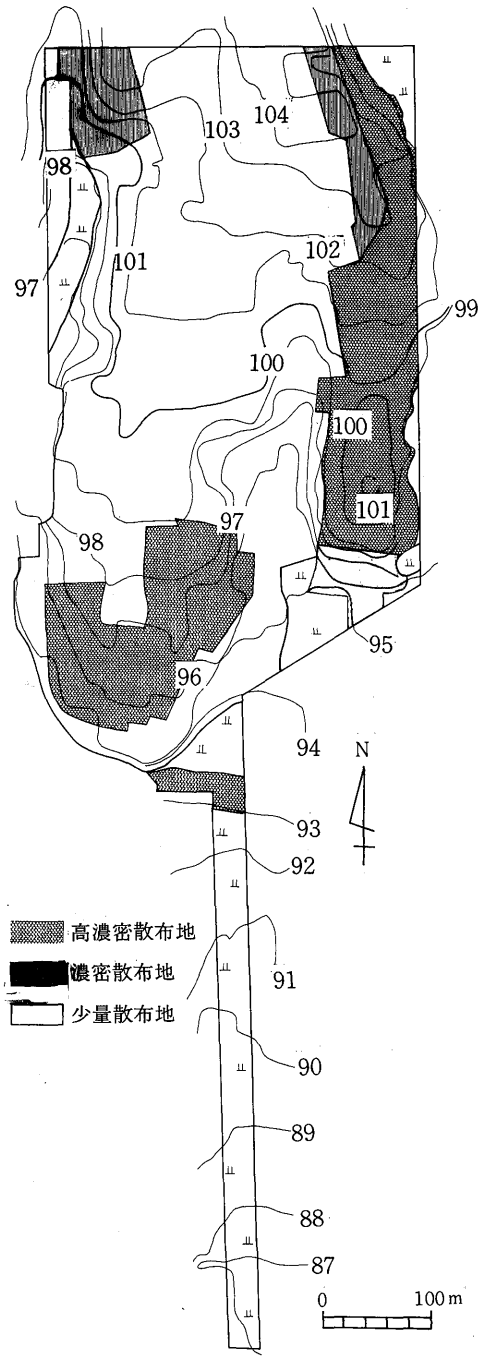
① 鶴谷遺跡群	② 今井神社古墳	③ 今井城遺跡
④ 前田遺跡	⑤ 権現山古墳	⑥ 諏訪西遺跡
⑦ 富田遺跡群	⑧ おとうか山古墳	⑨ 荒子小学校校庭遺跡
⑩ 荒子の砦跡	⑪ 新屋遺跡	⑫ 東道跡
⑬ 女堀跡	⑭ 宮川遺跡	⑮ 荒砥島原遺跡

挿図1　遺跡位置図

Ⅵ、発掘調査の経過と概要

1．範囲確認調査

(1)　表面採集調査



挿図２　マッピング状況図（単位：ｍ）

調査該当地は、赤城山麓南端の緩傾斜地に位置し、南部分では水田が広範囲に広がり、傾斜地との境において、２ｍ前後の比高差を示す。特に、この水田に連なる低地は隣接西側地域、調査区中央東寄り、および隣接東側地域に深く入りこんでおり、複雑な様相を呈している。したがって、マッピングによる遺物散布状況もこれに対応した形でとられられる。

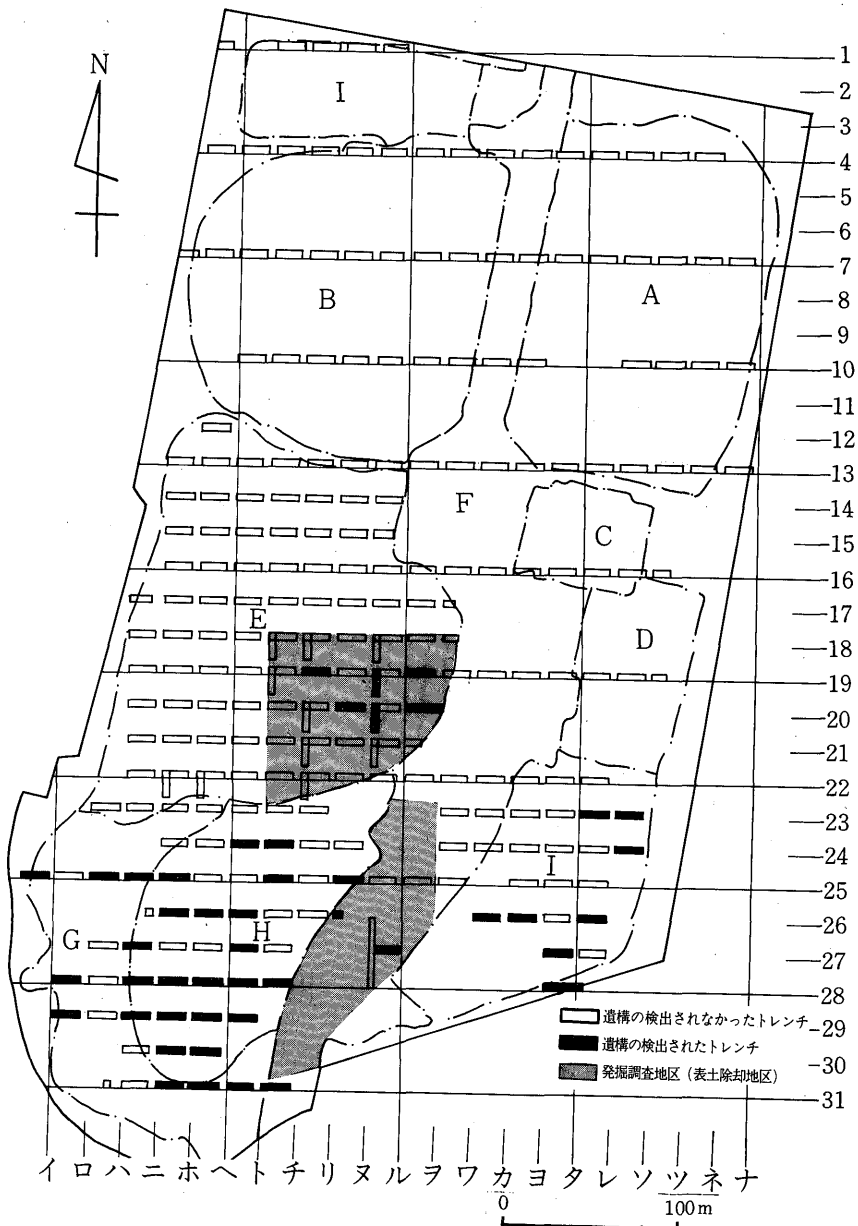
表面採集の結果は、大きく３種類に分けて図示した。すなわち、遺物がわずかに見られる地区を少量散布地として扱い、多量になるに応じて濃密散布地、高濃密散布地と分類した。（挿図２）

これによれば、前記の如く、谷をはさんだ西側、および東側台地に遺物の多量散布地を認めることができる。特に、東側台地では一面が高濃密散布地、あるいは濃密散布地であり、広範囲にわたっての遺構の存在が予測された。また、西側台地先端部分にも高濃密散布地がかなり広い範囲で認められており、ここにも遺構の存在が予測された。

なお、表面採集された遺物は土師器を中心としており、それらに混じってわずかに須恵器、縄文土器の各破片が認められた。

(2) 試掘調査

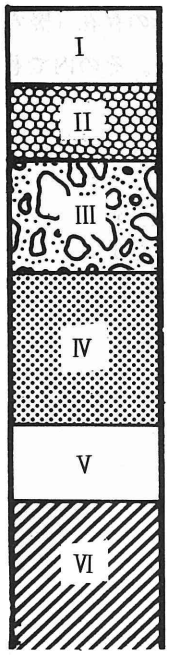
本調査に先立って、トレンチによる試掘を行った。表面採集結果に基づいて、遺構の確認を、目的としたものである。調査の結果、東側、および西側台地の南端部分において、遺構の存在（竪穴住居跡を主とする）が確認された。谷をはさんで両者が並列するような様相を呈する。その内でも特に、西側台地での遺構確認はかなりの数にのぼり、多数の遺構の存在が予測された。



挿図３トレンチ地番図

2．遺構調査の概要

(1) 地　　層



Ⅰ層　表土（耕作土）。

Ⅱ層　Ｂ軽石混りの砂質黒色土層。天仁元年（1108年）あるいは弘安四年（1281年）降下と推定されるＢ軽石を主とする。部分的には紫灰が確認されており、特に調査地中央に入りこむ低地では、純層も見られる。

Ⅲ層　黒褐色土。二ッ岳系軽石（六世紀代に降下したと推定される、以下Ｆと略す）とＣ軽石(浅間山軽石・４世紀頃の噴出と推定される）を含む。

Ⅳ層　Ｃ軽石を含む黒色土。

Ⅴ層　ローム漸移層。

Ⅵ層　ローム層

※Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層は調査該当地北半部、および東側台地では全く認められない。

図版１　鶴谷遺跡群発掘区遠景（西より望む）

時代別遺構の概要は以下のとおりである。

縄文時代：表面採集では、縄文時代前期と比定される土器片が発見されたが、遺物を伴う遺構の検出はなかった。縄文時代のピット、ＪＰ（遺構全体図参照）は、0.8ｍ×1.7ｍ、深さ1.1ｍの矩形で軽石を含まず、炭化粒を含む、暗褐色土を埋土とする。

古墳時代：発掘区南部より、11戸の竪穴住居跡、及びピット１が検出された。

奈良・平安時代：発掘区北部より、16戸、南部より12戸、合計28戸、２群の竪穴住居跡が検出された。南部の住居跡群は、更に西側に続くことが、試掘調査によって確かめられている。溝は１，２ともにごく浅く（深さ２cm～４cm）埋土層上部には、部分的にＢ軽石を混入している。溝－２はおおよそ直角に折れ、Ｈ－４～Ｈ－12を囲む様に存在する。曲点の所が最高レベル（99.23ｍ）を示し南東方向（終末地点のレベル98.92ｍ）および南西方向（99.04ｍ）へ延びる。この溝は住居跡群にとって何らかの意味を想像させる。大ピットはＨ－７と重複する地層断面の観察により、大ピットの方がＨ－７より新しいことがわかる。遺構確認面で2.1ｍ×2.9ｍの楕円形と、それに付属して0.9ｍ×1.6ｍの不整形の傾斜面を持つプランである。深さ１ｍのところで湧水が激しく底部については不明である。井戸は２つとも発掘区北部より検出した。井戸－１は、住居跡群中、井戸２は住居跡群より南方向で浅い谷を挟んだ反対側約30ｍに位置する。

以上のように本遺跡地の発掘調査は、竪穴住居跡が主な遺構であった。以下検出した住居跡Ｈ－１～Ｈ－39について、表にまとめる。

住居跡資料一覧表

住居番号	規　模(m)（長壁×短壁）	床面積(㎡)	走向（長　壁）（カマド壁）	カ　マ　ド	周　溝	柱穴	備　　考
1	4.9×3.3	16.17	N－29°－E	東壁南寄り	な　し	なし	貯蔵穴有、貼床構成、住居内ピット２有
2	4.5×3.0	13.50	N－20°－E	東壁南寄り	あ　り（４壁）	なし	貯蔵穴有、カマド片袖石使用
3	3.7×2.7	9.99	N－33°－E	東壁南寄り	な　し	なし	
4	4.2×3.2	13.44	N－26°－E	東壁南寄り	な　し	なし	貯蔵穴有 南北壁より東西壁の方が長い
5	5.1×4.0	20.4	N－14°－E	東壁南寄り	一部あり	なし	貯蔵穴有、住居内ピット１有
6	4.2×3.6	15.12	N－10°－E	東壁南寄り	一部あり	なし	住居内ピット１有
7	4.8×3.7	17.76	N－39°－E	東壁中央	不　明	不明	大ピットと重複
8	4.0×3.1	12.40	N－13°－E	東壁南寄り	一部あり	なし	住居内ピット１有 カマド袖石使用
9	5.5×5.0	27.50	N－27°－E	東壁南寄り	な　し	なし	南北壁より東西壁の方が長い
10	5.1×3.9	19.89	N－16°－E	東壁南寄り	な　し	なし	
11	4.8×3.5	16.80	N－23°－E	東壁南寄り	な　し	なし	貯蔵穴有、住居内ピット１有
12	3.8×3.1	11.78	N－15°－E	東壁南寄り	な　し	なし	
13	4.9×4.4	21.56	N－18°－E	東壁中央(旧) 東壁南寄り(新)	あ　り（４壁）	なし	貯蔵穴有２、カマド２有 住居内ピット１有
14	3.7×3.1	11.47	N－23°－E	東壁中央	な　し	なし	
15	3.5×3.3	11.50	N－９°－E	東壁中央	な　し	なし	
16	3.4×3.0	10.20	N	東壁中央	な　し	なし	貯蔵穴有、住居内ピット１有

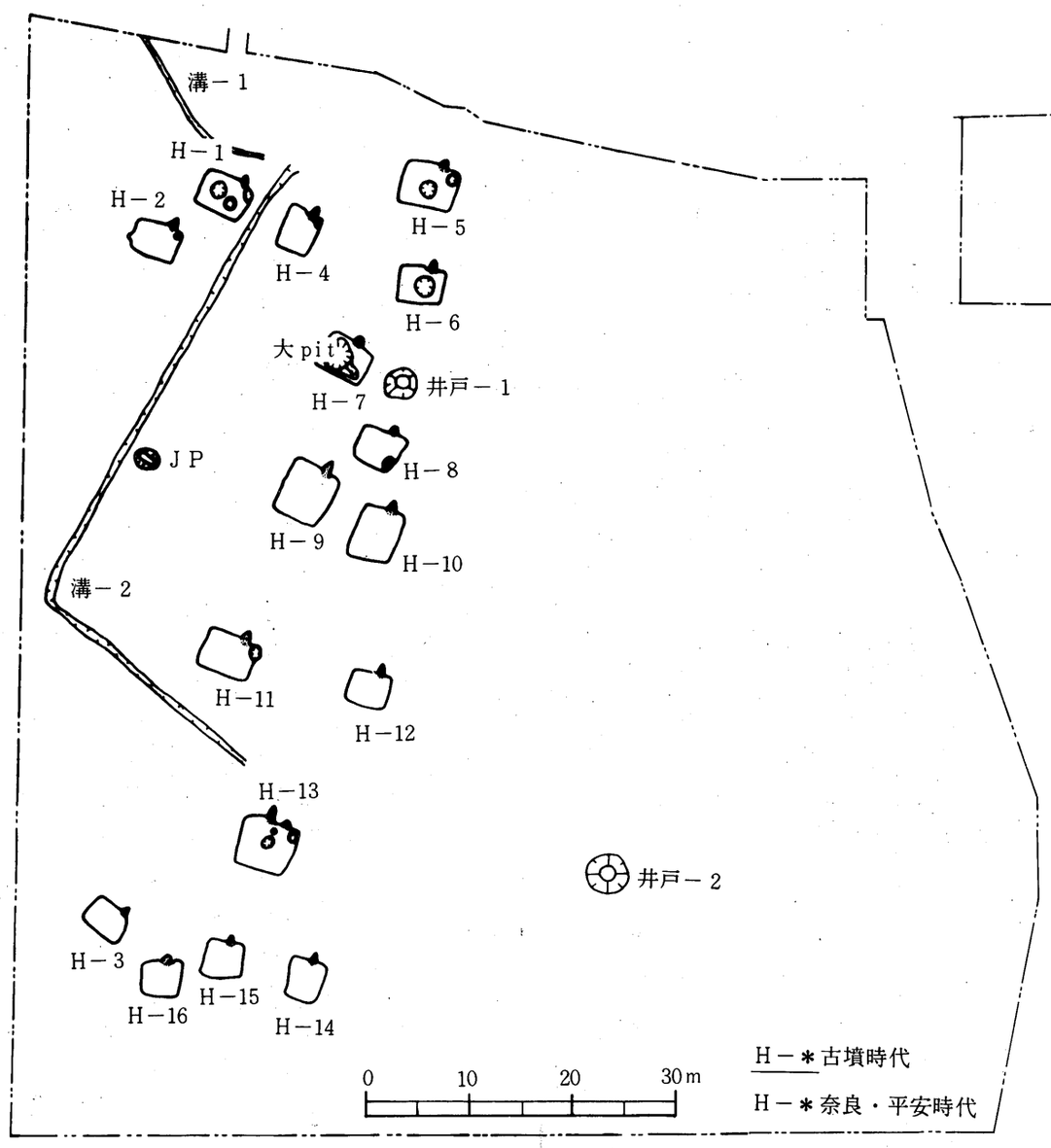
住居番号	規　模(m)（長壁×短壁）	床面積(m²)	走向（長　壁）（カマド壁）	カ　マ　ド	周　溝	柱穴	備　　考
17	4.3×2.8	12.04	N－24°－E	東壁中央	な　し	なし	南北壁より東西壁の方が良い
18	2.9×2.7	7.83	N－24°－E	な　し	な　し	なし	住居内中央に焼土有り
19	3.8×3.3	12.54	N－8°－E	東壁中央寄り	な　し	なし	貯蔵穴有 住居内4ヶ所焼土有
20	3.3×3.0	9.90	N－12°－E	東壁中央寄り	な　し	なし	南北壁より東西壁の方が長い
21	5.7×5.6	31.92	N－6°－E	東壁中央	な　し	あり(5柱)	貯蔵穴有、カマド袖土器使用
22	3.2×2.8	8.96	N	東壁南寄り	な　し	なし	貯蔵穴有 住居跡南 1.5m焼土
23	5.2×4.5	23.40	N－57°－E	な　し	あり(4壁)	あり(4柱)	火災住居跡、住居内中央焼土 炭化物多量に出土
24	4.7×4.4	20.68	N－18°－W	東壁中央寄り	な　し	あり(4柱)	貯蔵穴有
25	4.6×4.2	19.32	N－44°－W	東壁中央	な　し	あり(4柱)	貯蔵穴有
26	4.5×4.4 5.4×5.7	19.80 30.78	N－8°－W	東壁中央	な　し	あり(4柱)	拡張住居跡、貯蔵穴有
27	3.5×3.6	12.6	N－43°－W	東壁中央	な　し	あり(4柱)	貯蔵穴有
28	5.8×5.8	33.64	N－21°－W	な　し	な　し	あり(4柱)	貯蔵穴有
29	4.5×4.3	19.35	N－58°－E	東壁中央	な　し	あり(3+1?)	貯蔵穴有
30	3.2×2.6	8.32	N－22°－E	東壁南寄り	な　し	なし	貯蔵穴有
31	4.0×3.8	15.20	N－28°－W	東壁中央	な　し	なし	貯蔵穴有、カマド袖土器使用 支脚に土器使用
32	3.6×3.2	11.52	W－27°－S	北壁中央	な　し	なし	貯蔵穴有 カマド片袖に石使用
33	4.2×3.2	13.44	N－7°－E	東壁中央	な　し	あり(4柱)	貯蔵穴有
34	3.1×2.6	8.06	N－27°－E	不　明	な　し	なし	貯蔵穴有
35	5.7×5.6	31.92	W－36°－S	北壁中央	な　し	あり(4柱)	貯蔵穴有
36	3.6×3.2	11.52	N－5°－E	東壁南寄り	な　し	なし	貯蔵穴有 H－37と重複、H－36(新)
37	4.5×4.4	19.80	N－34°－W	東壁中央	な　し	なし	H－36と重複、H－37(旧)
38	2.8×2.0	5.60	N－24°－W	東壁南隅	な　し	なし	
39	3.0×2.6	7.80	E－12°－W	北壁東隅	な　し	なし	床面より規模推定

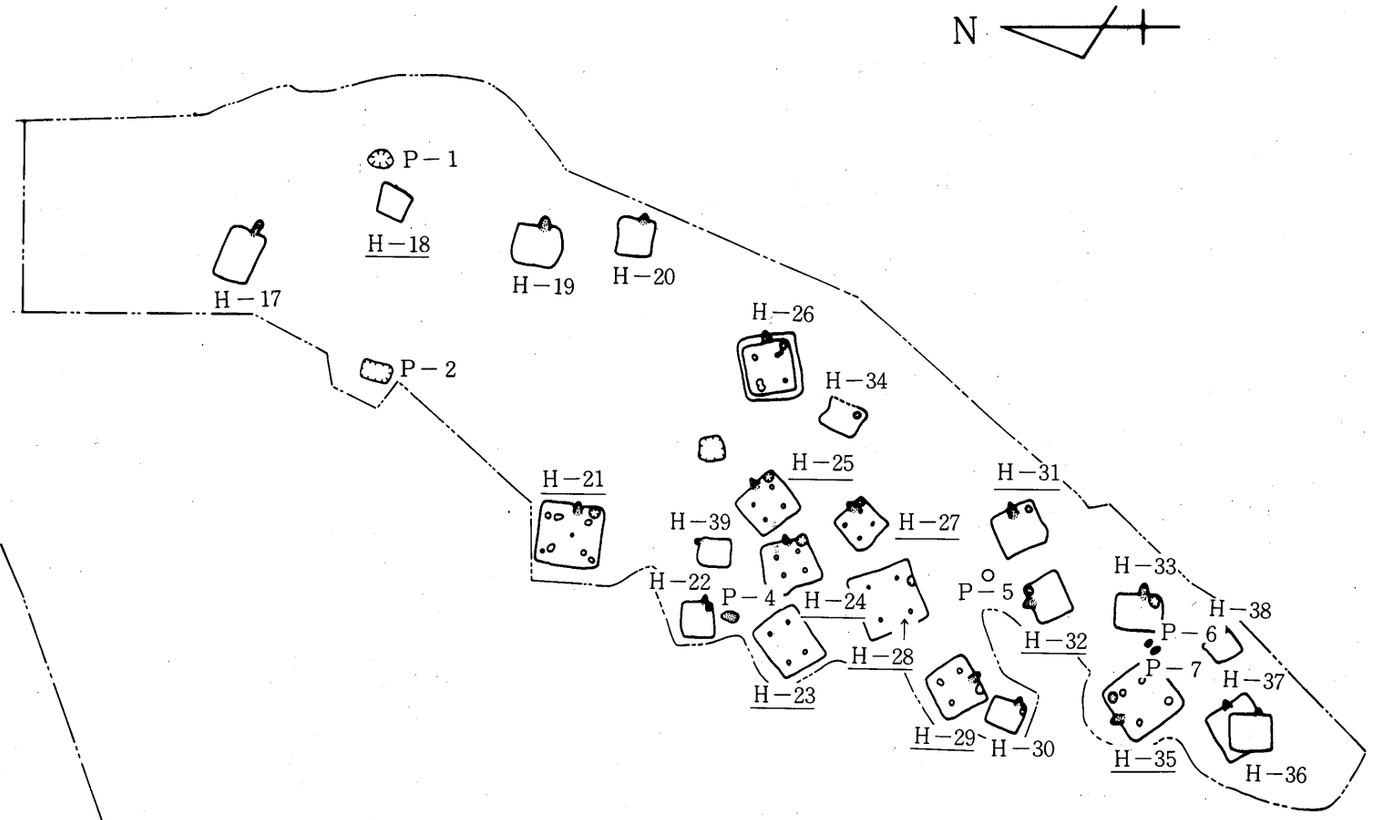
H－1～H－16は、発掘区北部で、H－17～H－39は発掘区南部で検出された。ピットは合計7であった。ピット個々についての資料は、以下表のとおりである。ピットの性格等については、判然としていないが、P－4は、H－22の南1.5mに位置し焼け込みが見られ、住居跡との関係が考えられる。P－5～P－7も著しい焼け込みが見られ、住居跡群にとって何らかの役割が想定されよう。

ピット資料一覧表

P－番号	平面形	規　模	深さ(確認面より)	備　　考
P－1	楕円形	2.2m×1.6m	23cm	埋土にC軽石、F系軽石を含む
P－2	矩　形	2.9m×1.7m	10cm～43cm	〃
P－3	不整形	2.7m×2.2m	10cm～46cm	〃
P－4	楕円形	1.8m×1.0m	10cm	ローム漸移層の焼け込みが著しい
P－5	不整形	1.2m×0.8m	90cm	埋土上部の焼け込みが著しい。古墳時代の土師器3個体分出土
P－6	楕円形	1.0m×0.5m	25cm	ピット内焼け込みが著しい
P－7	楕円形	0.7m×0.4m	25cm	ピット内焼け込みが著しい。壁に石あり（6cm×18cm）

遺構全体図





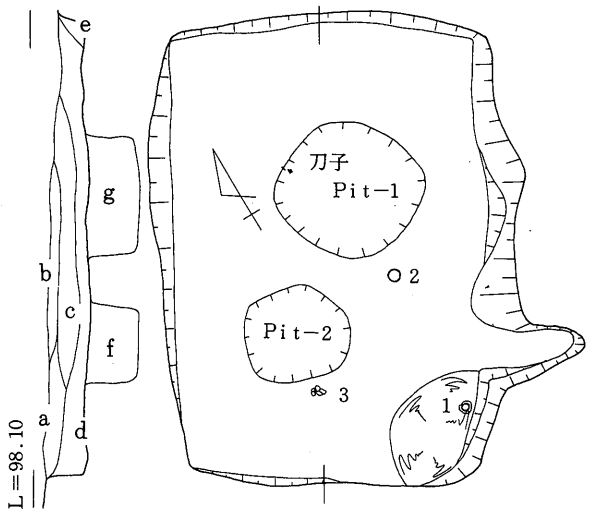
(2) 検出遺構

本遺跡地の発掘調査で検出した遺構は、竪穴住居跡39、ピット８、井戸２、溝２、大ピット１で総遺構数52である。時代別には下表のように分類される。

時代別＼遺構	竪穴住居跡	ピット	井　戸	溝	その他	総　数
縄　文　時　代	0	1 (JP)	0	0	0	1
古　墳　時　代	11	1	0	0	0	12
奈良・平安時代	28	0	2	2	0	32
不　　明	0	6	0	0	1(大ピット)	7
合　　計	39	7＋1	2	2	1	52

挿図４

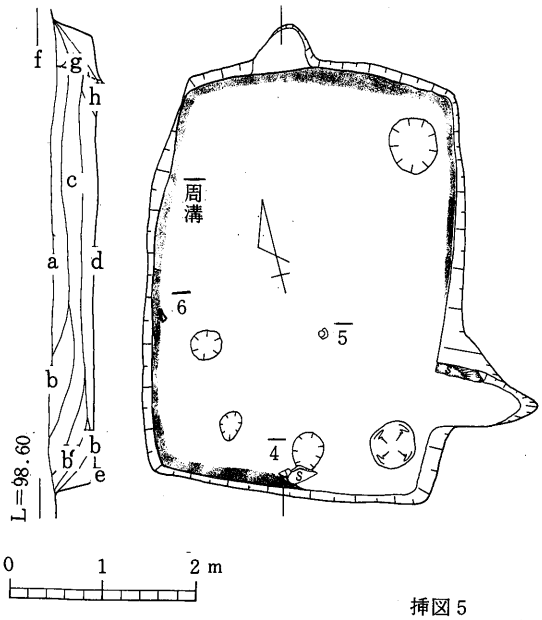
H－1号住居跡



a：暗褐色土層（焼土粒含む、粘性有、B軽石含む）
b：黒色土層（B軽石含む）
c：黒色土層
d：暗褐色土層（粘性有）
e：褐色土層
f：暗褐色土層
g：赤褐色土層（焼土ブロック、ロームブロック含む）

1号住居跡
◦床面は非常に固くしまり貼床構成（焼土を含む黒色土）がみられる。
◦Pit－1より土師器片出土

H－2号住居跡

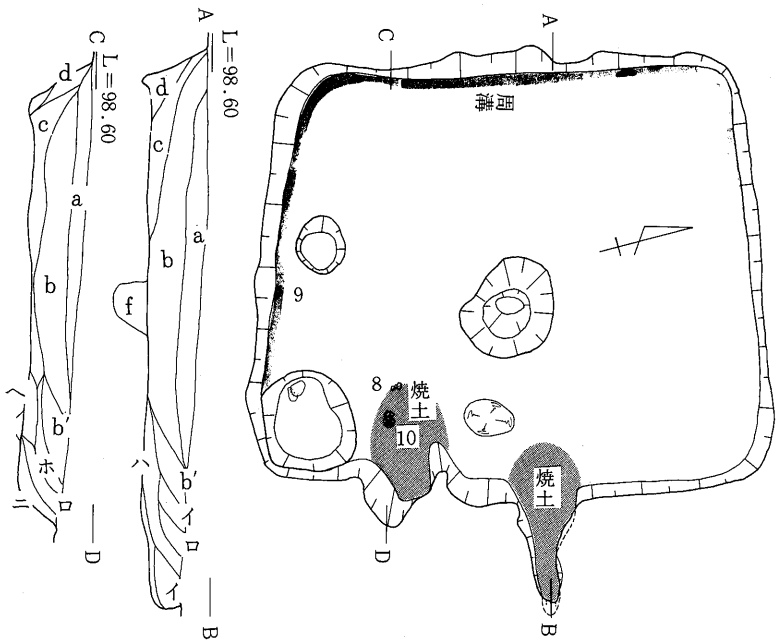


a：黒色土層（ローム粒少量混入）
b：暗褐色土層（ローム粒多量混入、C軽石、F系軽石含む）
b′：b層に比較してロームの混入がより多い
c：黒色土層（ローム粒多量混入、C軽石、F系軽石含む）
d：黒褐色土層（ローム粒多量混入、C軽石、F系軽石含む）
e：黒色土層（ローム粒混入、C軽石、F系軽石含む）
f：褐色土層（ロームに黒色土混入、C軽石、F系軽石含む）
g：暗褐色土層（黒色土にローム粒、焼土粒混入
C軽石、F系軽石含む）
h：灰褐色土層（ローム粒、ロームブロック混入、
炭化物少量混入、C軽石、F系軽石含む）
i：黒褐色土層
（焼土ブロック、焼土粒混入、炭化物少量混入
C軽石、F系軽石含む）

2号住居跡
◦北壁にある凸型遺構の性格は不明。
住居跡との時間的前後関係も明確ではないが、
地層断面の点線は住居壁と思われる。

挿図5

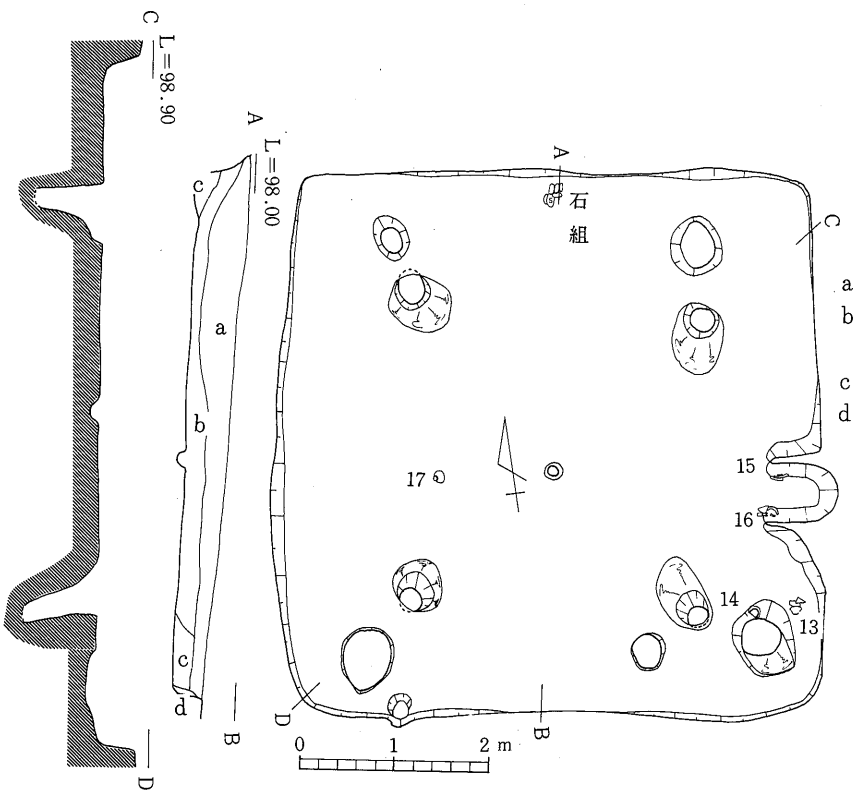
H－13号住居跡



a：黒色土層（C軽石、F系軽石含む）
b：黒褐色土層（C軽石、F系軽石含む）
b′：b層に焼土粒少量混入
c：黒褐色土層（C軽石、F系軽石含む）
下層にローム、ブロック混入）
d：暗褐色土層（C軽石、F系軽石含む）
ローム粒混入）
e：褐色土層（ロームと黒色土との混土）
f：黒色土層（焼土、炭化物含む）
イ：赤褐色土層（焼土粒、ローム粒混入）
ロ：赤褐色土層（焼土ブロック多量に混入）
ハ：黒色土層（焼土ブロック混入）
ニ：黒色土層（炭化物含む）
オ：暗褐色土層（ローム粒、焼土粒含む、
C軽石、F系軽石含む）
ヘ：灰褐色土層（粒性有）

13号住居跡
◦カマド２基付属
地層断面より北カマド(旧)→南カマド(新)

H－21号住居跡

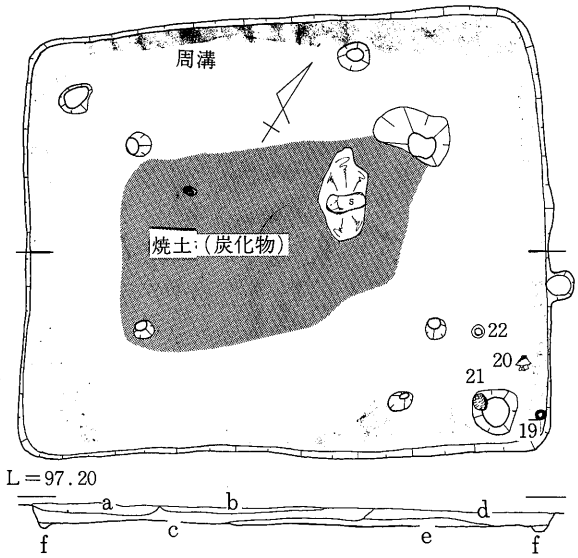


a：黒色土層（C軽石、F系軽石含む）
b：黒褐色土層（ローム粒含む
C軽石、F系軽石含む）
c：黒色土層（C軽石、F系軽石含む）
d：黒色土とローム粒の混土層

21号住居跡
◦カマドに土器使用
◦柱穴〈４＋(4)＋１〉
◦住居跡内石組あり

挿図６

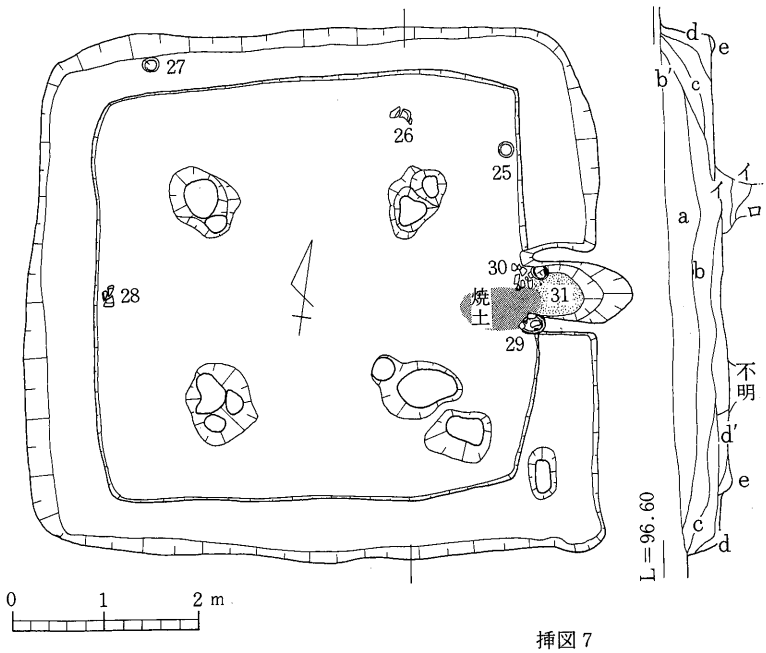
H－23号住居跡



a：黒色土層
b：黒色土層（C軽石含む）
c：暗褐色土層（ローム粒、焼土、炭化物含む）
d：c層より、ローム粒多量に混入
e：c層より、炭化物多量に混入
f：暗褐色土層（ローム粒と黒色土との混土）

23号住居跡
◦火災住居跡（床面より多量の炭化木出土）
◦床面中央より北寄りの石(S)は、表面が薄く剥離（火災による加熱か？）している、周囲は凹に落ち込んでいるが焼跡はない。

H－26号住居跡

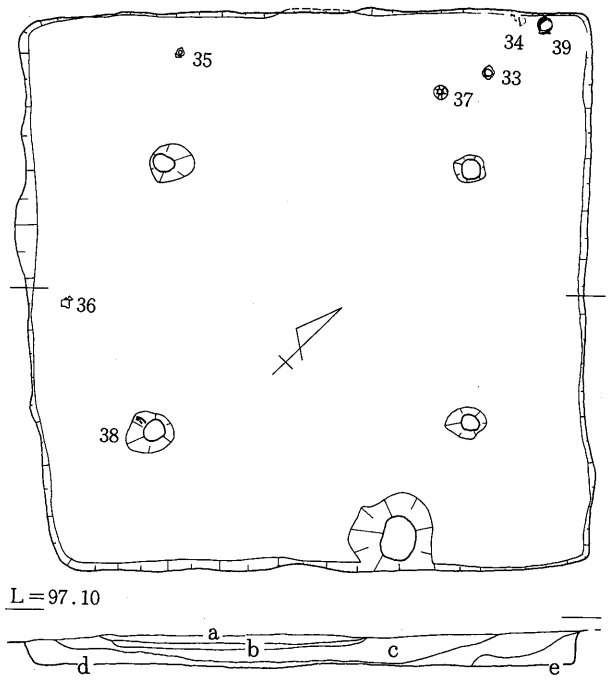


a：黒色土層（砂質）
b：黒褐色土層（少量の焼土含む）
b′：b層より淡色
c：黒色土層（少量の焼土含む）
d：黒色土とロームブロックの混土
d′：d層より黒色土多量
e：漆黒土
f：黒色土、褐色土と、ロームブロックとの混土層
イ：黒褐色土（褐色土ブロック混入）
イ′：イ層より淡色
ロ：黒褐色土と褐色土の混土層

26号住居跡
◦拡張住居跡
新・旧住居のカマド跡は重複・新カマドは旧カマドを取り壊して造られる。

挿図7

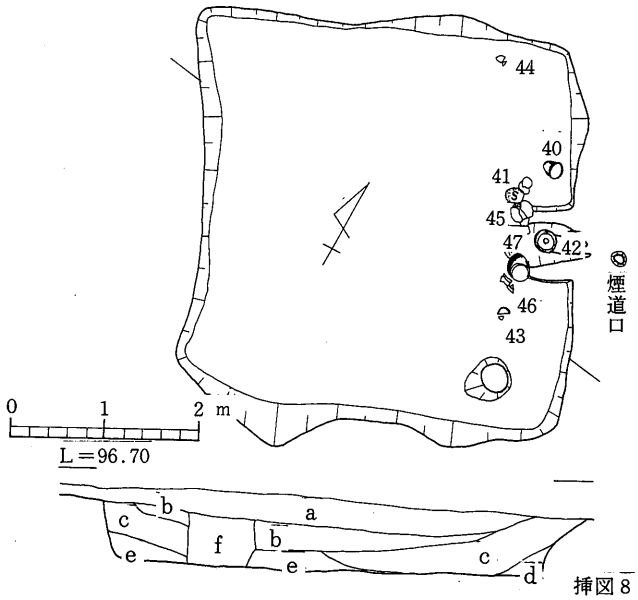
H－28号住居跡



a：黒色土層
b：黒色土層（褐色土、灰〈F系か？〉
軽石多量に含む）
c：褐色土層（ローム粒、C軽石、
炭水化物含む）
d：褐色土層（ローム粒含む）
e：黒褐色土層

28号住居跡
◦カマドおよび炉跡等なし

H－31号住居跡

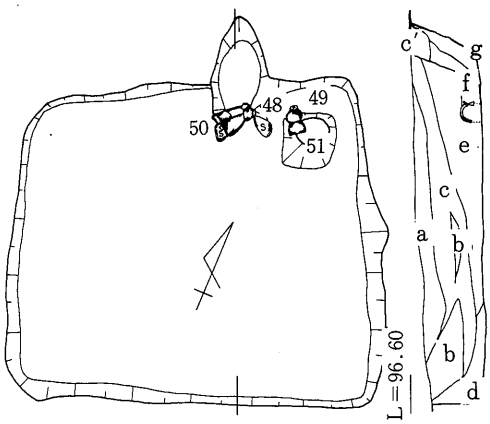


a：黒褐色土層（C軽石多量に含む）
b：黒色土層（粘性有、C軽石含む）
c：褐色土層（粘性有、焼土粒含む）
d：黒色土層（褐色土混入）
e：暗褐色土層（漆黒土混入）
f：黒褐色土層（暗褐色土混入）

31号住居跡
◦カマド袖部分に土器使用
支脚に土器使用

挿図8

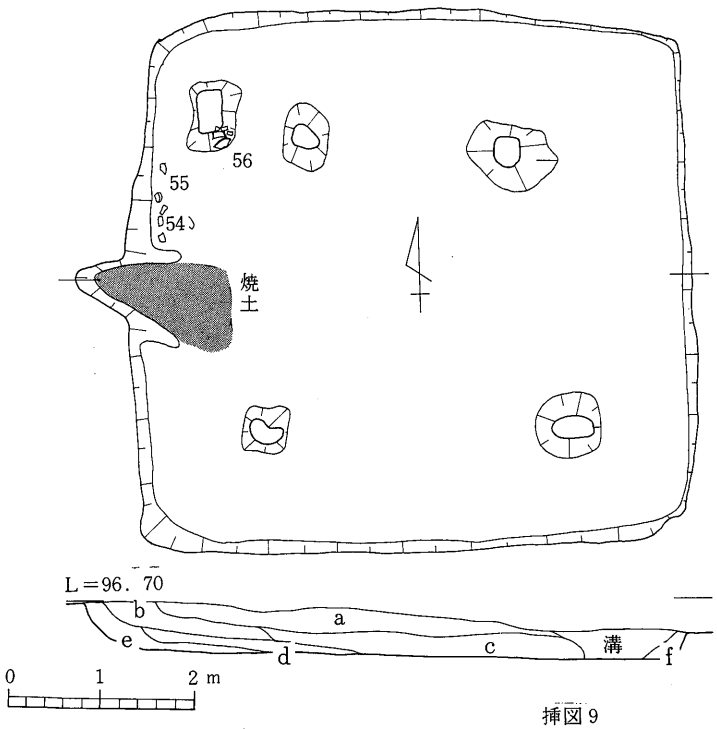
H－32号住居跡



a：黒色土層（C軽石、F系軽石含む）
b：黒褐色土層（ロームブロック混入、C軽石、F系軽石含む）
c：暗褐色土層（ローム粒、ロームブロック混入、C軽石、F軽石含む）
c′：c層に焼土粒含む
d：黒褐色土層（C軽石、F系軽石含む）
e：黒褐色土層（焼土粒混入、C軽石、F系軽石含む）
f：赤褐色土（焼土粒多量に含む）
g：ローム漸移層（黒色土混入）

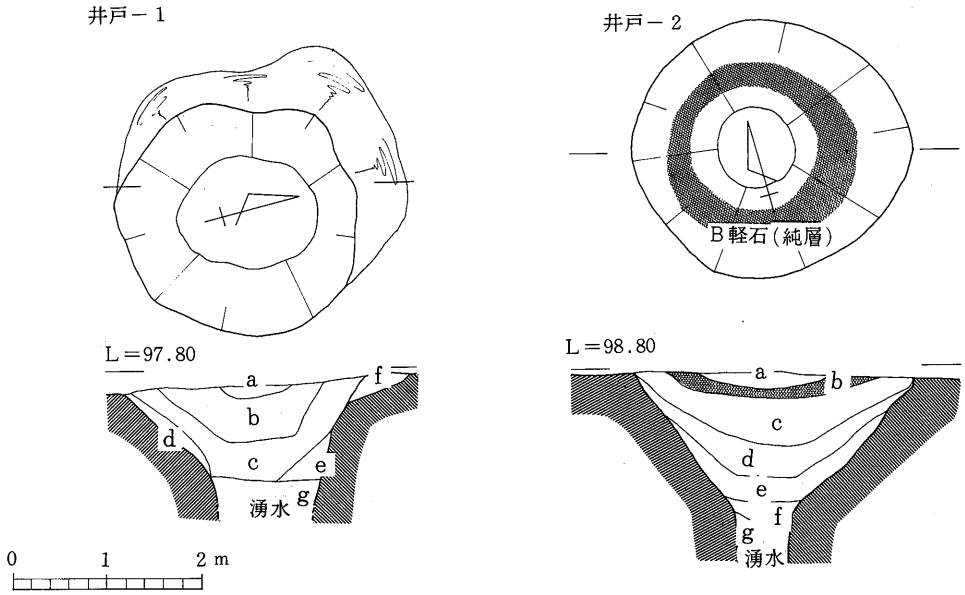
32号住居跡
◦カマド両袖部分に石使用

H－35号住居跡



a：褐色土層（ローム粒混入 F系軽石含む）
b：褐色土層（ローム粒、焼土粒混入、F系軽石含む）
c：褐色土層（黒色土部分的に混入、F系軽石含む）
d：赤褐色土層（焼土粒多量に混入、F系軽石含む）
e：赤色（焼土、ブロック、灰混入）
f：黒色土層（ローム粒混入）

挿図9



a：黒色土層（砂質）
b：暗褐色土層(白色粘土をブロック状に含む)
c：黒褐色土層（砂質をおびる）
d：黒褐色土層（ローム混入）
e：褐色土層（黒色土混入）
f：黄褐色土層
g：黒褐色土層（褐色土と黒色土の混土）

a：黒色土層（多量のB軽石を含む）
b：B軽石の純層（紫灰確認）
c：黒色土層（C軽石を含む）
d：暗褐色土層
e：暗褐色土層（ローム粒混入）
f：褐色土層（黒色土とローム粒との混土）
g：褐色土層（f層より多量の黒土混入）

挿図10

前掲図面は、住居跡39軒のうち主なもの10軒と井戸跡２についての平面図及び地層断面図である。39軒については時代差、平面プランの相異、カマドの形態、貯蔵穴、柱穴の有無等様々に分類されるが、遺構、出土遺物について総合的に検討をした結果、本遺跡地での特徴的な住居跡として以下の理由により10軒の例を選別した。

北部の一群H－１～H－16は、奈良・平安時代に属すると思われる土器を伴出する住居跡が集中し、比較的小規模の矩形平面プランを持つ。南北軸に長壁を持ち南東方向に面し、カマドは東壁南寄り或いは東壁中央付近に位置する。周溝、柱穴等は無い例が多い。H－１は貼床構成を持ち住居内にピットを有する。H－２は周溝を四壁に持ち、カマド袖部分(片)に石の使用がみられる。H－13はカマドが作り変えられている。

南部の一群H－17～H－39では奈良・平安時代に加えて古墳時代住居跡を検出した。特別な住居跡として、火災住居跡、H－23と、四壁を全体に拡張増築したとみられるH－26を掲げた。古墳時代住居跡では柱穴の伴う例が多く(全体平面図参照)H－21では、主柱穴と考えられるピット５(４＋１〈中央〉)と、支柱穴４を検出した。H－28は、本遺跡で検出した最大規模の住居跡である。正方形プランを持ち、カマドはなく、柱穴(4)を有する。またH－35の平面プランは、H－28に似るが北壁中央にカマドを持つ。H－31のカマドは、袖部分に土器の使用及び支脚として、高坏の脚の利用がみられる。H－32は、比較的小規模で北壁中央にカマドを持ち袖部分には、石の使用が見られる。

3．出土遺物

検出した竪穴住居跡のうち、前項で取り上げた10軒から出土した遺物、及び、それ以外の住居跡から出土した主な遺物は、下表のとおりである。

出土遺物観察一覧表

1号　住居跡

遺物番号	器　種	法 量 (cm)	技　法　等	胎　土	備　考
挿図11－1	須恵器・坏	器高 3.7 口径13.4 底径 7.5	外面、横なで整形、ロクロ使用、 底部、外面、回転を利用したヘラ切り	砂粒、小石粒含有	灰青色 焼成良好
挿図11－2 図版5－1	須恵器・椀	器高 5.9 口径14.5 底径 7.5	内外面とも横なで整形 底部外面に墨書「仝」の字有り	砂粒、小石粒含有	灰黒色 焼成普通
挿図11－3 図版5－2	土師器・甕	長さ19.5	口縁部内外面横なで整形 体部外面斜方向ヘラなで整形	砂粒含有	赤褐色 焼成普通

遺物番号	種　類	法 量 (cm)	備　考
図版5－3	刀　子	長さ14.0	鉄　製

2号　住居跡

遺物番号	器　種	法 量 (cm)	技　法　等	胎　土	備　考
挿図11－4 図版5－4	土師器・坏	器高 3.5 口径13.3	内外面とも横なで整形 底部、不定方向のヘラ削り整形、外面に墨書「大」の字有り	砂粒含有	赤褐色 焼成良好
挿図11－5 図版5－5	須恵器・高台付椀	器高 4.0 口径12.0 底径 7.5	内外面とも横なで整形 底部外面に回転糸切り痕を残す	砂粒含有	灰色 焼成良好

遺物番号	種　類	法 量 (cm)	備　考
挿図11－6 図版5－6	鉄　斧	長さ13.3	鉄　製

9号　住居跡

遺物番号	器　種	法 量 (cm)	技　法　等	胎　土	備　考
挿図11－7 図版5－7	須恵器・高台付椀	器高 4.3 口径10.8 底径 8.2	内外面とも横なで整形、ロクロ使用 底部外面、回転を利用したヘラ切り痕有り	砂粒含有	灰白色 焼成良好

13号　住居跡

遺物番号	器　種	法 量 (cm)	技　法　等	胎　土	備　考
挿図11－8 図版5－8	土師器・甕	器高37.6 口径24.8 底径 6.3	口縁部、内外面とも横なで整形 体部、外面、不定方向のヘラ削り整形 体部、内面は手によるなで整形	砂粒含有	褐色（側面部分的にこげ有り）焼成普通
挿図11－9 図版5－9	土師器・坏	器高 3.8 口径13.5	口縁部、内外面とも横なで整形、ロクロ使用 底部、内面は手によるなで整形、外面はヘラ削り整形	砂粒、小石粒含有	褐色 焼成良好
挿図11－10 図版5－10	土師器・高坏	脚口唇部径 10.7	内外面とも横なで整形、ロクロ使用	砂粒含有	褐色焼成良好 脚底部のみ残

遺物番号	種　類	法 量 (cm)	備　考
図版5－11	刀　子	長さ21.0	鉄　製

18号　住居跡

遺物番号	器　種	法 量 (㎝)	技　　法　　等	胎　土	備　考
挿図11－11 図版５－12	土師器・壺	器高23.2 口径16.7 底径 7.3	口縁部、内外面とも横なで整形 体部外面、不定方向のヘラ削り整形 底部、ヘラ削り整形、体部の中ほどにへこみをもって成形	砂粒、小石粒含有	褐色（体部に黒色有り） 焼成良好
挿図12－12 図版５－13	土師器・壺	器高16.2 口径12.0 底径 6.5	口縁部、内外面横なで整形 体部外面、上半横方向ヘラ削り整形、下半、斜方向ヘラ削り整形、底部ヘラ削り整形	砂粒、小石粒若干含有	赤褐色 焼成良好

21号　住居跡

遺物番号	器　種	法 量 (㎝)	技　　法　　等	胎　土	備　考
挿図12－13 図版５－14	土師器・坏	器高 4.8 口径13.2	口縁部、内外面とも横なで整形、ロクロ使用 底部、外面不定方向のヘラ削り整形	砂粒含有	黒褐色 焼成良好
挿図12－14 図版５－15	土師器・坏	器高 3.9 口径12.4	口縁部、内外面とも横なで整形、ロクロ使用 底部外面、不定方向のヘラ削り整形	砂粒、小石粒含有	黒色 焼成良好
挿図12－15 図版５－16	土師器・甕	口径20.6	口縁部、内外面とも横なで整形、ロクロ使用 体部外面、　縦方向のヘラ削り整形	砂粒含有	褐色（部分的に赤味、黒味をおびる）焼成普通
挿図12－16 図版６－17	土師器・甕	口径17.5	口縁部、内外面横なで整形 体部外面縦方向のヘラ削り整形	砂粒、小石粒含有	褐色 焼成普通
挿図12－17 図版６－18	土師器・高坏		坏部底外面、斜方向ヘラ削り整形 脚部外面縦方向のヘラ削り整形、内面に輪積みの痕跡有り	砂粒含有	褐色 焼成良好
挿図12－18 図版６－19	土師器・椀	器高 5.1 口径12.6 底径 5.7	口縁部外面横なで整形、内面ヘラによる整形 体部外面、横方向ヘラ削り整形 底部外面、ヘラ削り整形	砂粒、小石粒含有	褐色（底部に少しこげ有り） 焼成良好

23号　住居跡

遺物番号	器　種	法 量 (㎝)	技　　法　　等	胎　土	備　考
挿図12－19 図版６－20	土師器・椀	器高 4.5 口径10.7 庭径 5.3	外面なで整形、下部縦方向に櫛目調整	砂粒含有	淡褐色、部分的に黒味をおびる 焼成普通
挿図12－20 図版６－21	土師器・甕	器高12.2 口径12.6 底径 4.6	口縁部、横なで整形 体部外面斜方向に櫛目調整 内面横なで整形	砂粒含有	淡褐色、部分的に黒味をおびる 焼成普通
挿図12－21 図版６－22	土師器・壺	器高20.5 口径10.0 底径 5.4	口縁部、横なで整形 体部外面、上半横なで整形 下半縦方向ヘラなで整形	砂粒、小石粒含有	淡褐色、部分的に黒味をおびる 焼成良好
挿図12－22 図版６－23	土師器・鉢	器高10.1 口径26.2 底径 9.3	口縁部、横なで整形 体部外面ヘラ整形	砂粒、小石粒含有	淡褐色、部分的に黒味をおびる 焼成不良

25号　住居跡

遺物番号	種　類	法 量 (㎝)	備　　考
挿図12－23 図版６－24	刀　子	長さ11.2	鉄　製 柄の一部と思われる木片附着

26号　住居跡

遺物番号	器　種	法 量 (㎝)	技　　法　　等	胎　土	備　考
挿図12－24 図版６－25	土師器・坩	器高 6.5 口径 8.0	口縁部、内外面横なで整形、体部内面ヘラ整形 体部外面、上半縦方向、下半横方向ヘラ削り整形	砂粒含有	褐色 焼成普通
挿図12－25 図版６－26	土師器・坏	器高 3.3 口径11.9 底径12.3	口縁部外面及び内面全体横なで整形、ロクロ使用 底部外面不定方向のヘラ削り整形	砂粒、小石粒含有	淡褐色 底部一部黒色 焼成良好
挿図12－26 図版６－27	土師器・高坏	口径19.3	坏部、内外面、横方向なで整形 外面下部櫛目調整	砂粒、小石粒含有	褐色焼成良好 坏部のみ残

遺物番号	器　種	法 量 (cm)	技　　法　　等	胎　土	備　考
挿図12－27 図版６－28	土師器・ 坏	器高 4.6 口径13.9 底径10.8	口縁部内外面、横なで整形、ロクロ使用 底部外面、不定方向のヘラ削り整形	砂粒含有	淡褐色 底部一部黒色 焼成良好
挿図12－28 図版６－29	土師器・ 坏	器高 3.7 口径12.0	口縁部横なで整形 底部、内外面ともに凹部分が多く、荒れている。	砂粒、小石粒 含有	淡褐色 焼成普良
挿図12－29 図版６－30	土師器・ 甕	器高25.5 口径18.0 底径 7.2	口縁部内外面横なで整形、ロクロ使用 体部外面縦方向のヘラ削り整形、輪積み成形	砂粒含有	赤褐色 焼成普通
挿図13－30 図版６－31	土師器・ 甕	口径22.0	口縁部内外面とも横なで整形 体部外面は縦方向のヘラ削り整形	砂粒、小石粒 含有	淡褐色 焼成普通
挿図13－31 図版６－32	土師器・ 甕	器高30.5 口径19.7	口縁部、内外面とも横なで整形。体部外面斜方向のヘラ削り整形、輪積み成形、体部内面に成形痕残存	砂粒、小石粒 含有	褐色 焼成普通

27号　住居跡

遺物番号	器　種	法 量 (cm)	技　　法　　等	胎　土	備　考
挿図13－32 図版７－33	土師器・ 鉢	器高 8.5 口径20.0	口縁部、内外面横なで整形 底部外面、不定方向ヘラ削り整形、内面ヘラ整形	砂粒、小石粒 含有	淡褐色 焼成良好

28号　住居跡

遺物番号	器　種	法 量 (cm)	技　　法　　等	胎　土	備　考
挿図13－33 図版７－34	土師器・ 椀	器高 6.7 口径12.0 底径 4.0	口縁部、内外面とも横なで整形 体部、底部、内外面ともヘラによる整形	砂粒、小石粒 含有	赤褐色 焼成普通
挿図13－34 図版７－35	土師器・ 高坏	器高11.3 口径13.7 脚口唇部径11.2	坏部、内外面とも横なで整形、ロクロ使用 脚部内面に巻上げの痕跡有り	砂粒含有	赤褐色 焼成良好
挿図13－35 図版７－36	土師器・ 高坏	脚口唇部 径　14.2	脚部外面、縦方向ヘラ削り整形 下部横なで整形、ロクロ使用	砂粒含有	褐色 焼成良好
挿図13－36 図版７－37	土師器・ 坏	器高 5.3 口径18.5 底径 4.0	口縁部横なで整形、底部内面にヘラ痕跡有り 口縁部から体部にかけて斜方向にはけ目調整	砂粒含有	褐色 焼成良好
挿図13－37 図版７－38	土師器・ 高坏	器高16.5 口径18.5 脚口唇部径13.3	坏部、脚部とも横なで整形、ロクロ使用 坏部内面、縦方向のヘラ整形	砂粒含有	褐色 焼成良好
挿図13－38 図版７－39	土師器・ 高坏	口径19.7	口縁部内外面とも横なで整形、ロクロ使用 坏底部外面ヘラなで整形	砂粒含有	褐色（内面黒色をおびる） 坏部のみ残
挿図13－39 図版７－40	土師器・ 甕	器高18.2 口徒13.0 底径 6.5	口縁部、内、外面横なで整形 体部外面、斜方向のヘラ削り整形 内面は縦方向にヘラなでの痕跡有り	砂粒含有	褐色、下部黒味おびる 焼成良好

遺物番号	種　類	法 量 (cm)	備　　考
挿図15－57 図版７－41	勾　玉	長さ 1.4	・緑色　　・径1.5mmの孔が一つ有る ・碧玉製　・よく研磨されている

31号　住居跡

遺物番号	器　種	法 量 (cm)	技　　法　　等	胎　土	備　考
挿図13－40 図版７－42	土師器・ 甑	器高11.7 口径18.0 底径 5.3	口縁部、内外面横なで整形 体部外面縦方向ヘラなで整形、内面にヘラ痕跡有り 底部に穴一つ（径2.2cm）	砂粒含有	淡褐色 焼成良好
挿図13－41 図版７－43	土師器・ 短頸壺	器高 9.8 口径11.0	口縁部、内外面横なで整形、体部横なで整形 底部ヘラなで整形	砂粒含有	褐色 焼成良好
挿図13－42 図版７－44	土師器・ 高坏	口径20.6	坏、口縁部内外面横なで整形、ロクロ使用 脚部、縦方向ヘラ削り整形	砂粒含有	褐色 焼成良好

挿図13－43 図版７－45	土師器・ 坏	器高 4.2 口径13.3	口縁部、内外面横なで整形、ロクロ使用 底部外面、不定方向ヘラ削り整形	砂粒、小石粒 少し含有	黒色 焼成普通
挿図13－44 図版７－46	土師器・ 坏	器高 4.6 口径12.0	口縁部内外面横なで整形 底部外面不定方向ヘラ削り整形、内面横なで整形	砂粒含有	赤褐色 焼成普通
挿図14－45 図版８－47	土師器・ 甕	口径19.8	口縁部、内外面とも横なで整形、ロクロ使用 体部内面横なで整形、外面縦方向ヘラ削り整形	砂粒、小石粒 少し含有	淡褐色 焼成良好
挿図14－46 図版８－48	土師器・ 甕	口径20.1	口縁部、内外面とも横なで整形、ロクロ使用 体部内面横はで整形、外面縦方向ヘラ削り整形	砂粒、小石粒 含有	淡褐色 焼成良好
挿図14－47 図版８－49	土師器・ 坏	器高 5.3 口径13.0	口縁部、底部ともに、ていねいななで整形	砂粒含有	褐色 焼成良好

32号　住居跡

遺物番号	器　種	法 量 (cm)	技　　法　　等	胎　土	備　考
挿図14－48 図版８－50	土師器・ 台付甕	底径 9.4	外面にヘラ先きによる斜模様有り 内面下端部内折、指によるなで整形、指紋残	砂粒含有	褐色、黒味を帯びる、焼成良存台のみ残
挿図14－49 図版８－51	土師器・ 甕	器高13.3 口径11.0 底径 8.3	体部外面、縦方向のヘラ削り整形 内面ヘラ跡有り、口唇部横なで整形 底部外面に、ヘラ先きによる丫型模様有り	砂粒含有	淡褐色 底部黒色 焼成良好
挿図14－50 図版８－52	土師器・ 甕	器高35.4 口径22.8 底径 4.0	口縁部横なで整形、ロクロ使用 体部外面縦方向ヘラ削り整形	砂粒、小石粒 含有	淡褐色、黒味をおびる 焼成普通
挿図14－51 図版８－53	土師器・ 甑	器高 9.4 口径18.4 底径 8.2	口唇部内外面とも横なで整形、体部外面不定方向ヘラなで整形、輪積み成形、底部に五つの小孔有り、底外部に二つの小孔を作ろうとした痕有り	砂粒含有	褐色 焼成良好

33号　住居跡

遺物番号	器　種	法 量 (cm)	技　　法　　等	胎　土	備　考
挿図14－52 図版８－54	須恵器・ 蓋	器高 3.9 つまみ径 3.8 口径16.5	内外面横なで整形 ロクロ使用	砂粒含有	灰色 焼成良好
挿図14－53 図版８－55	須恵器・ 蓋	器高 3.8 つまみ径11.8 口径18.8	内外面横なで整形 ロクロ使用	砂粒含有	灰色 焼成良好

35号　住居跡

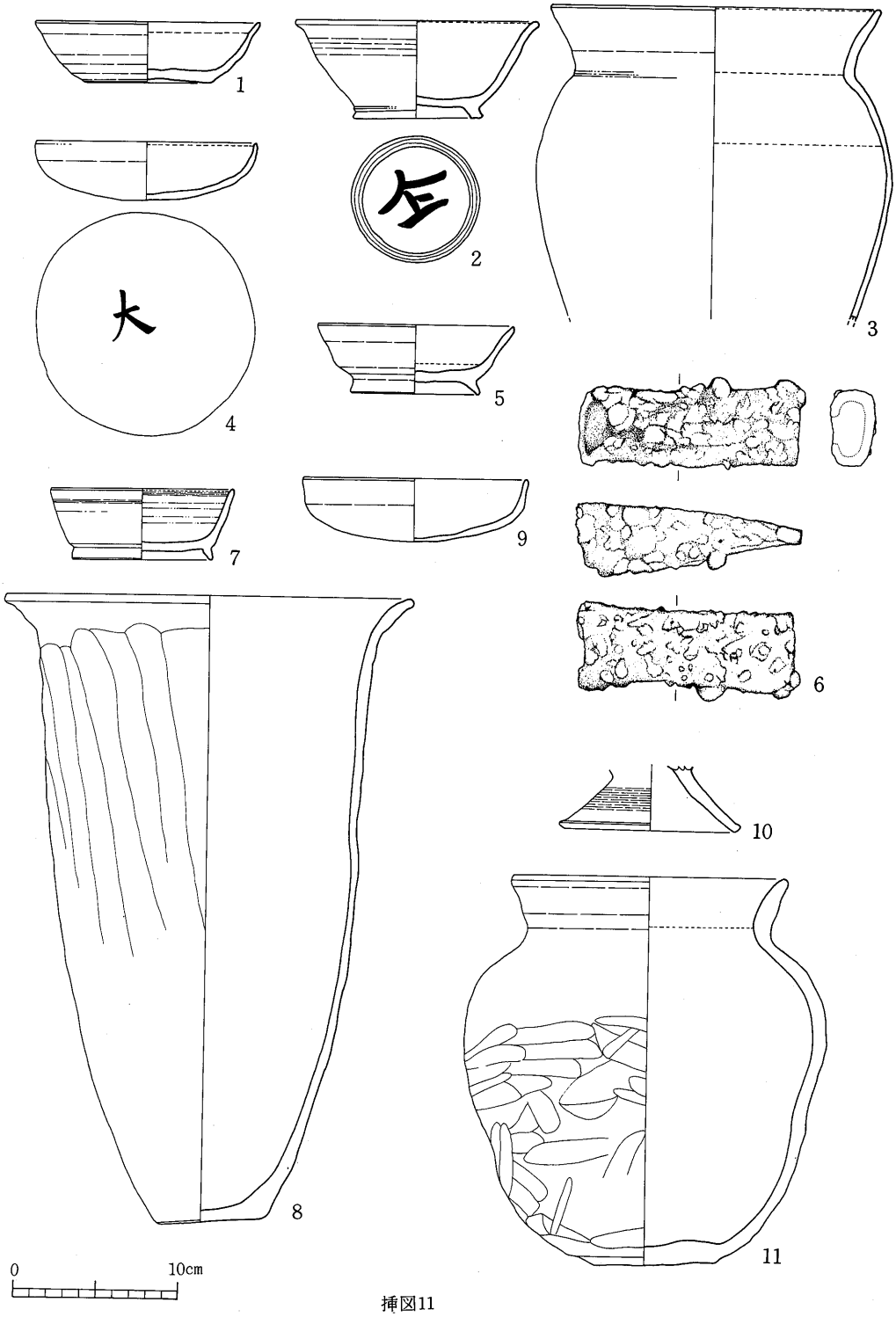
遺物番号	器　種	法 量 (cm)	技　　法　　等	胎　土	備　考
挿図14－54 図版８－56	土師器・ 坏	器高 5.2 口径12.0	口縁部、内外面横なで整形 体部外面不定方向ヘラ削り整形	砂粒、小石粒 含有	黒褐色 焼成不良
挿図14－55 図版８－57	土師器・ 坏	器高 4.4 口径14.5	口縁部、内外面横なで整形 体部外面一定方向ヘラ削り整形	砂粒含有	黒色 焼成不良
挿図14－56 図版８－58	須恵器・ 高坏	器高20.0 口径13.3 脚口唇部径14.6	坏部分、内外面とも横なで整形、ロクロ使用 脚部、横なで整形、脚部に細長い孔が上下２ヶ、３列に入っている、坏部やや一方にかたむいている。	砂粒含有	灰黒色 焼成良好

36号　住居跡

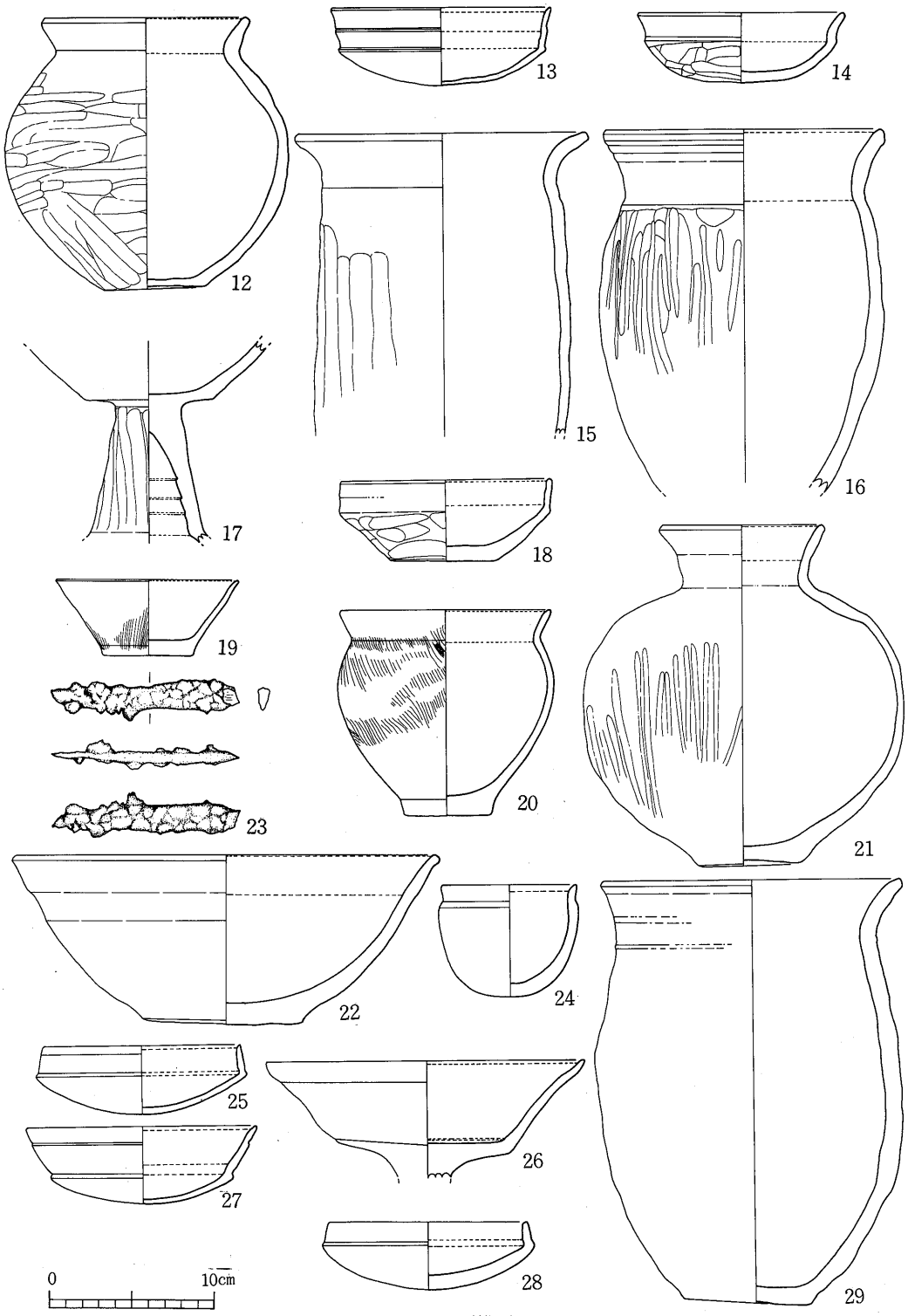
遺物番号	種　類	法 量 (cm)	備　　考
挿図15－58 図版８－59	石製模造品	長さ 6.0	暗緑色、滑石製 径３㎜の孔が１つ有る

表面採集

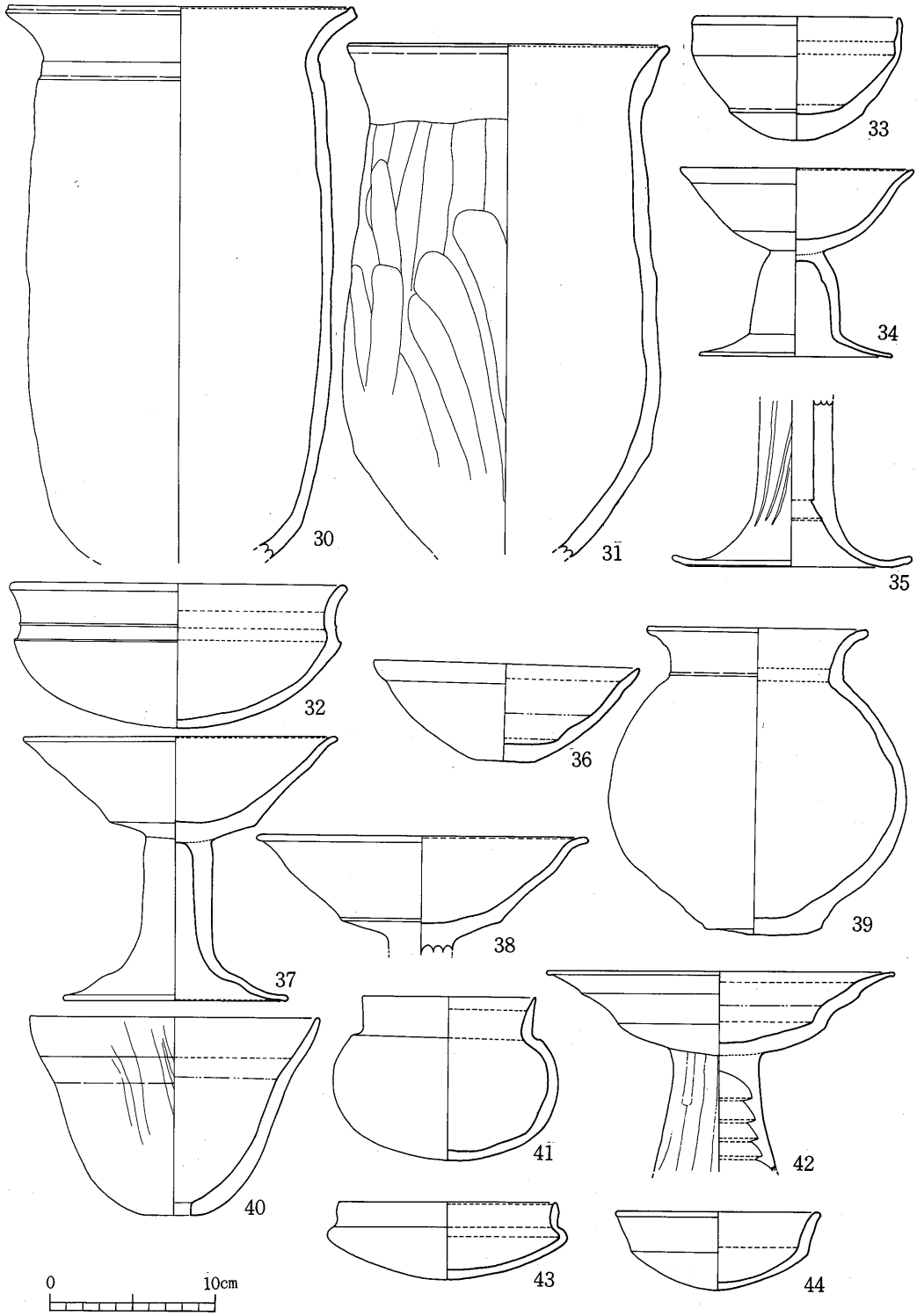
遺物番号	種　類	法　量	技　　法　　等	胎　土	備　考
	縄文土器	小　片	羽状縄文がほどこされている。	砂粒含有	淡褐色 焼成普通



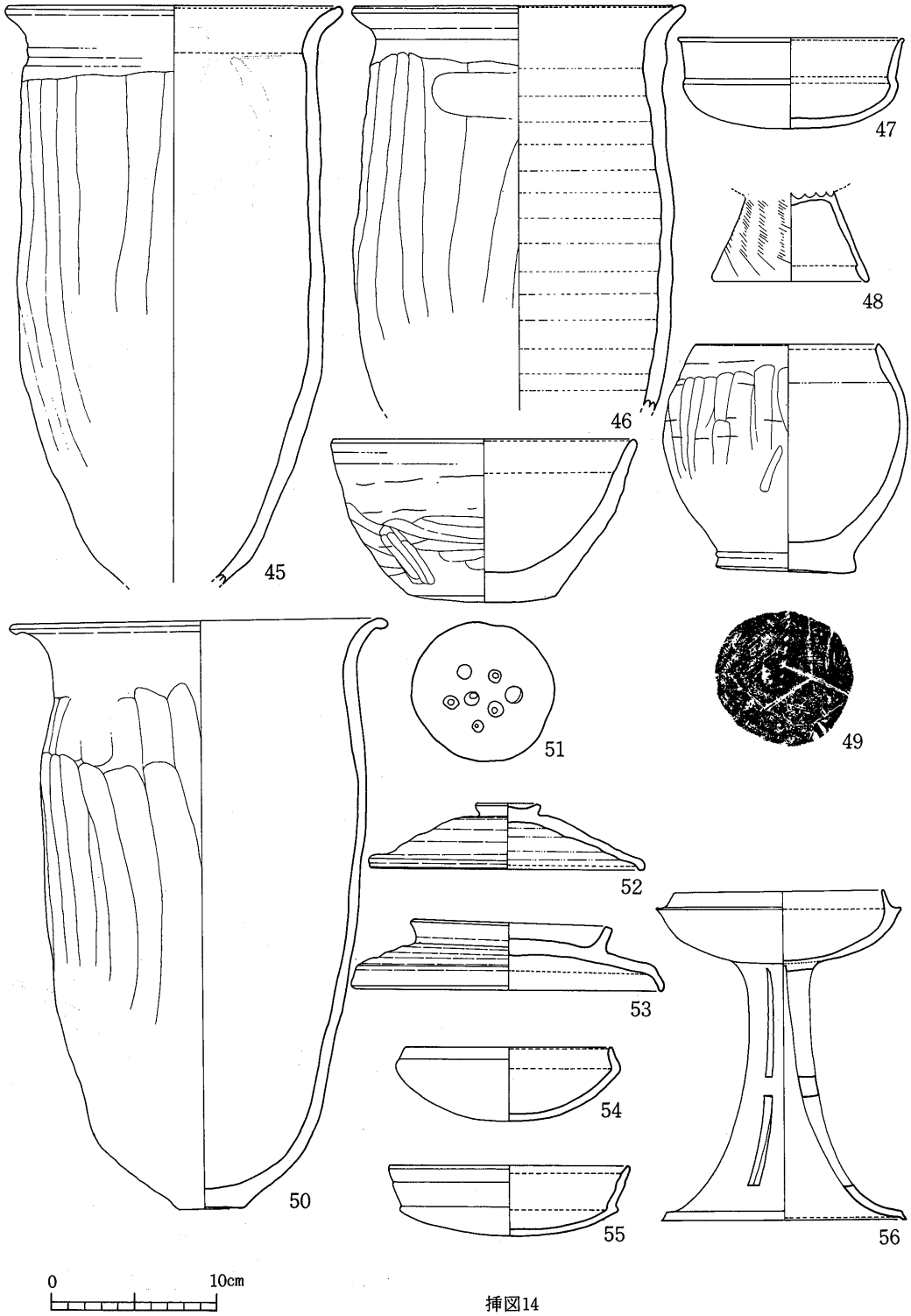
挿図11



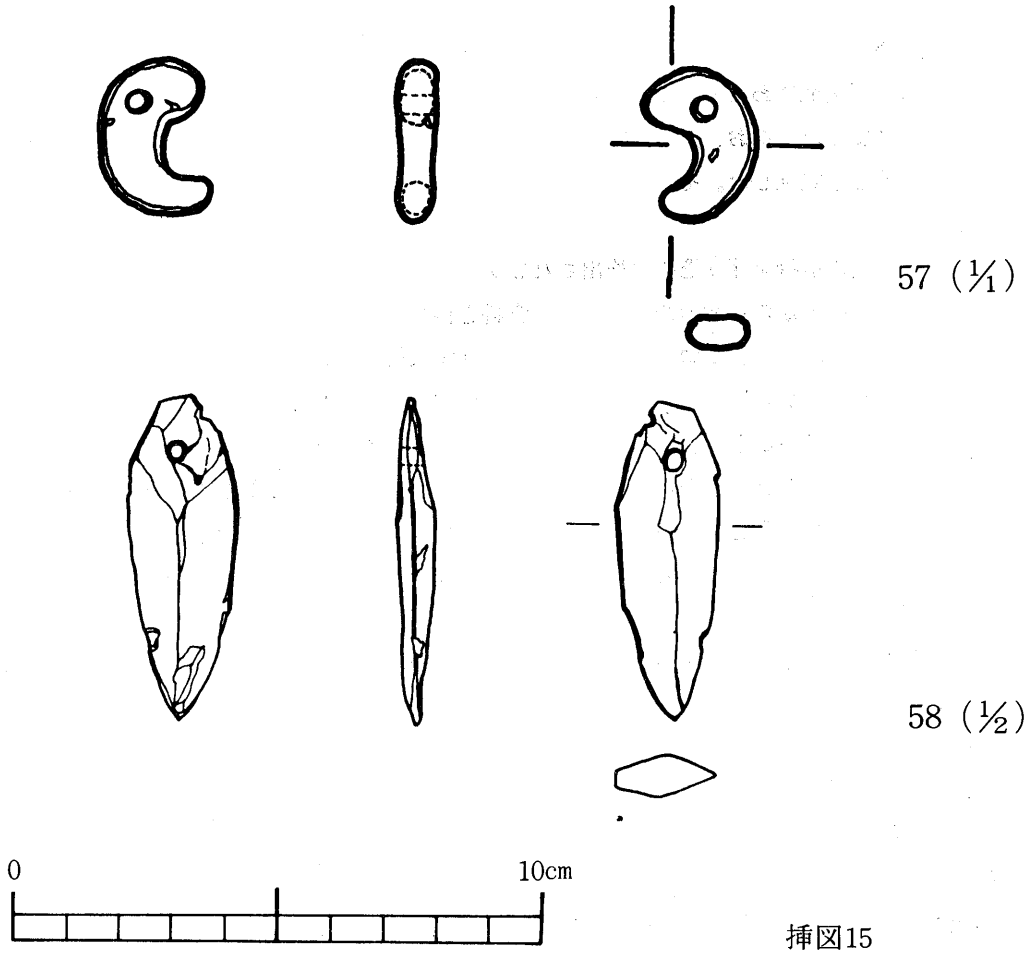
挿図12



挿図13



挿図14



挿図15

以上が主な出土遺物の観察一覧表およびその実測図である。

なお、本発掘調査で出土した遺物の全体は、プラスチック製パン箱約30箱分であった。ほとんどの遺物は竪穴住居跡より出土したものである。ピット－５より土師器３個体分が出土したのみで、その他のピットおよび溝からの出土遺物は確認されていない。遺物の大半は、土師器・須恵器であり、年代的には古墳時代より奈良・平安時代に至るものに比定される。

発掘区北部では、甕・坏の土師器および、坏、高台付の須恵器の出土を多くみた。特殊な遺物として、墨書土器２（土師器１、須恵器１）、刀子、鉄斧があげられる。発掘区南部では、土師器の出土を主流として、須恵器の伴出する住居跡と、伴わないものとに二分される。土師器種は多岐にわたり、坏、高坏、椀、壺、甕、鉢、甑等見られる。その他、刀子、勾玉(碧玉製)、石製模造品(滑石製）の出土があった。

各住居跡についての年代の比定は、各遺物、遺構についての更に詳細なる検討を今後必要とするが、北部検出住居跡は、おおよそ、奈良・平安時代に属する一群のものと思われる。南部の一群は南東に面した斜面にあり、更に西に延びる住居跡群の東隅の一部の調査であったが、古墳時代より奈良・平安時代に至る時期の大住居跡群の存在を推定させる。

Ⅳ まとめ

調査該当地区全域にわたる試掘調査の結果、東側、および西側台地の南端部分において遺構の存在が明らかになった。なお、上記試掘調査の結果遺構の存在が推定された地域のうち、本年度該当地区の発掘調査を実施した。その結果、検出した遺構、遺物をとおして次のような点が明らかになった。

(1) 縄文時代の遺物を伴う遺構は検出されなかったが、表面採集では、縄文時代に属する土器片を発見し、その期の生活の跡を推定する資料を得た。

(2) 発掘区南部からは、土師器及び須恵器を伴う竪穴住居跡23戸を検出した。

この住居跡群からは、竈を有しないもの、柱穴のしっかりしたもの、竈の袖が住居内に入りこんで作られているもの、竈の袖に石や土器が使われているもの等の諸形態が見られた。また、遺物としては、奈良、平安時代に比定されるものの他に、古式土師器を伴うものから、古墳時代後期に比定される遺物を伴出する住居もあり、碧玉製の勾玉も出土した。

これらのことから、発掘区南部には、古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落の存在が推定される。

(3) 発掘区北部からは、土師器及び須恵器を伴う竪穴住居跡16戸を検出した。

この住居跡群の遺構は、南部のものと比較して、竈を住居外に造り出していること、柱穴を有するものがないことが特徴として上げられる。また、遺物としては、奈良・平安時期に比定される甕や坏、椀、それに鉄製の斧や刀子が出土した。

これらのことから、発掘区北部では、奈良・平安時代の集落の存在が確認された。

(4) なお、発掘区北部一帯は、南東方向へのなだらかな傾斜地と北東方向へのなだらかな傾斜地が合わさるようにして東の浅い谷へ傾斜している地形である。

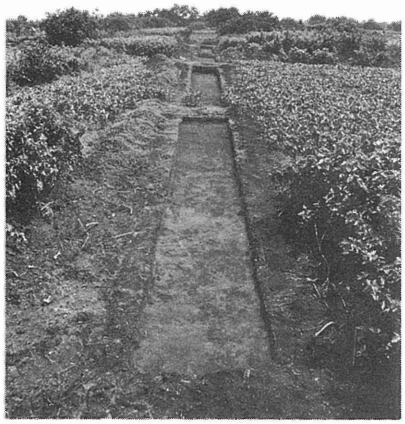
16戸の住居跡は、すべて南東方向へのなだらかな傾斜地に重複なく検出された。この住居跡群の立地する傾斜地は、東の浅い谷に近づくにつれて、床面から水が湧き出すほどの湿地になっている。16戸のうち２戸(Ｈ－５・６号）の住居跡からは、床面のほぼ中央部分にすり鉢状の穴を検出した。これは、住居跡群をとり囲むようにして作られていた溝とともに、今後、地形と居住との関係を考える上で貴重な資料になると思われる。

(5) その他、生活、生産に関係する井戸・ピットの存在が明らかとなった。

これらの成果のうち、特に(2)、(3)は、前橋市の歴史の中に、新たに鶴谷遺跡群における古墳時代及び、奈良・平安時代の集落の存在を加えて、歴史を組み立たせる素材を提供するものと考えられる。

なお、本発掘区南の台地の南端及び谷をへだてた東の台地には、遺物の多量散布に加えて、トレンチによる確認調査によって、遺構の存在も確認されている。このことから、遺物は、谷を挟んだ、両台地に、大規模な範囲で存在していると推定される。

図版 2

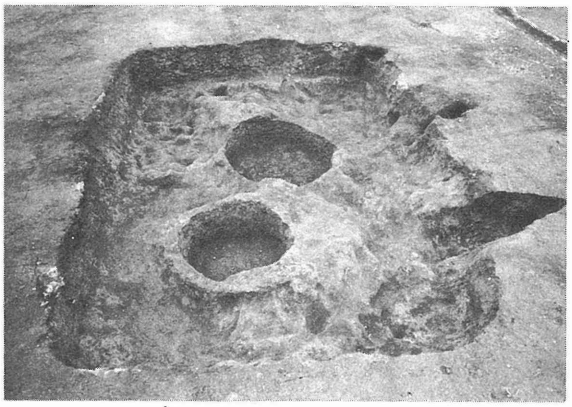


遺跡地中央トレンチ(西より望む)

北部発掘区、竪穴住居跡群全景

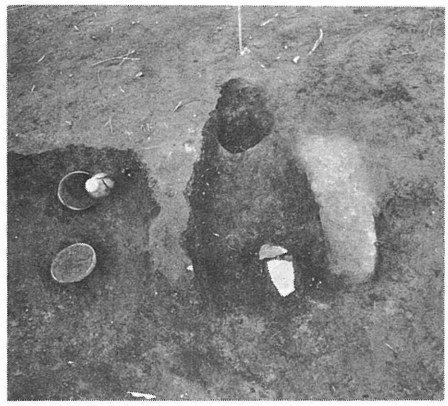
南部発掘区(手前重複住居跡、H-36, -37)

遺跡地南部トレンチ(谷、西より望む)

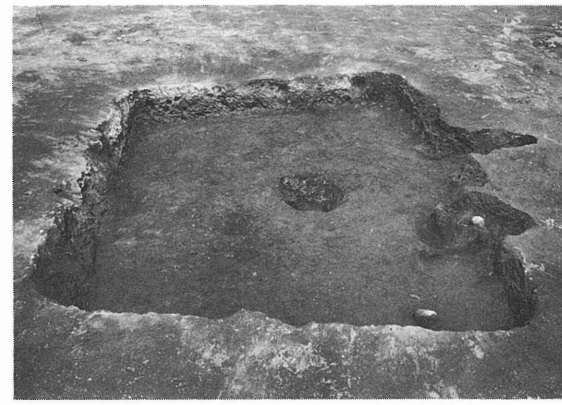


H-1号住居跡(住居内Pit有)

図版 3

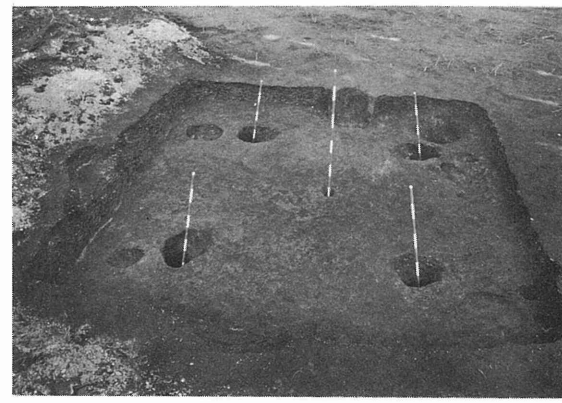


H-24住居跡カマド(遺物出土状態)



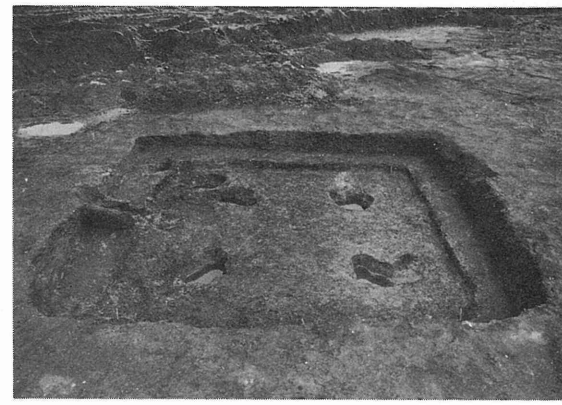
H-13号住居跡(カマド跡 2 基)

H-21住居跡カマド(袖部分土器使用)



H-21号住居跡(ポールは柱穴跡)

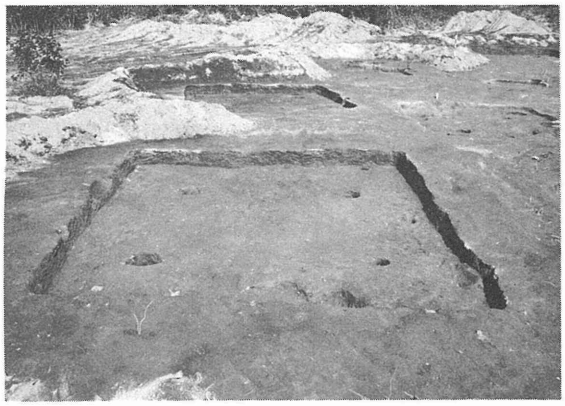
H-26号住居跡カマド(遺物出土状態)



H-26号住居跡(拡張住居跡)

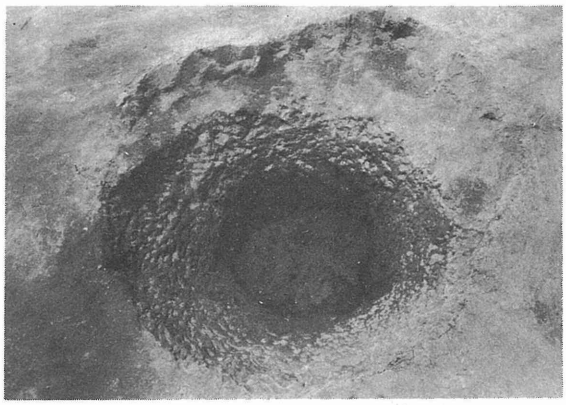
図版 4

H-31号住居跡カマド(袖に土器使用)



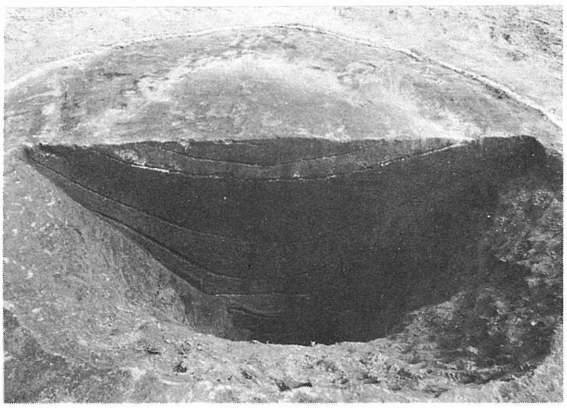
H-31号住居跡

H-31号住居跡カマド(支脚に土器使用)



井戸跡－１号

H-32住居跡カマド(袖に石使用)



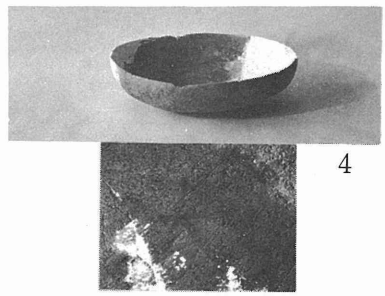
井戸跡－２号（地層断面）

図版 5

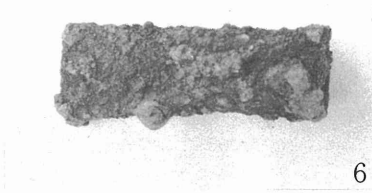
1

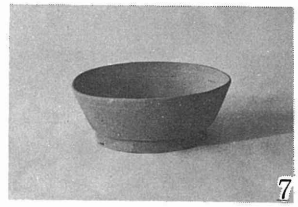
2

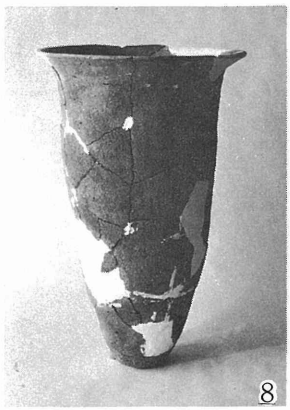
3

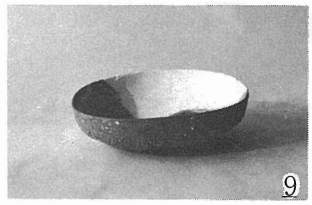

4

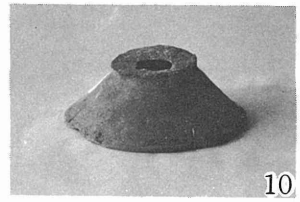
5


6

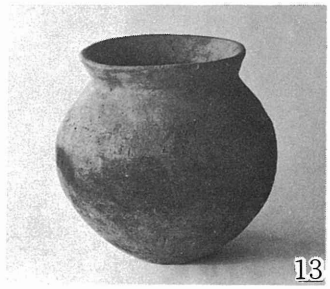

7

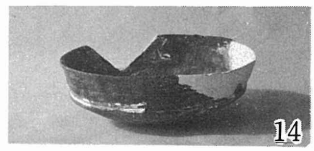

8


9


10

11


13

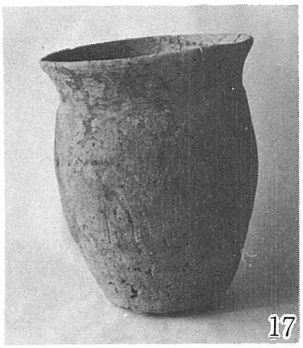

14

12

15

16

図版 6

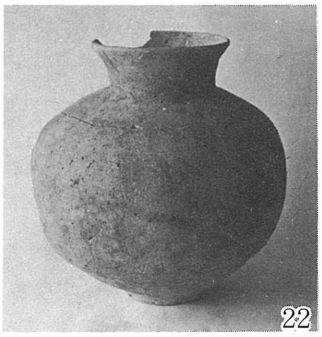

17

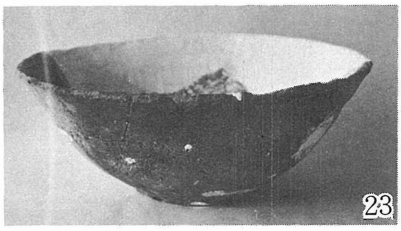
18

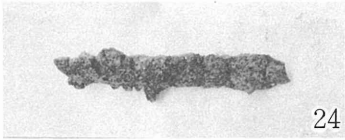
19

20

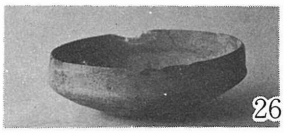
21

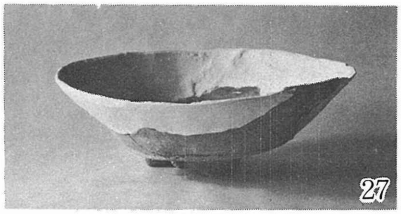

22


23

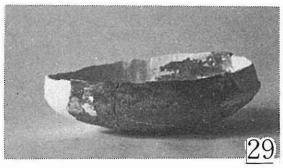

24

25

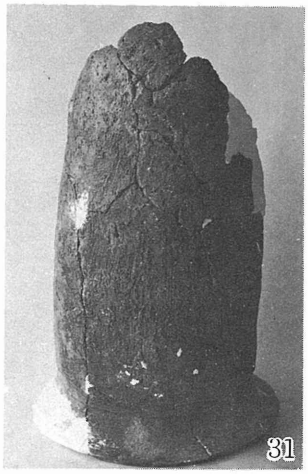

26


27

28

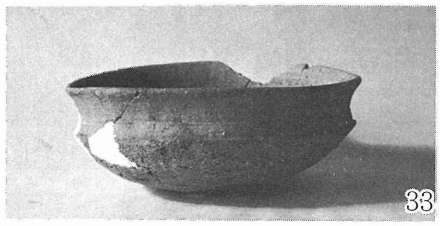

29

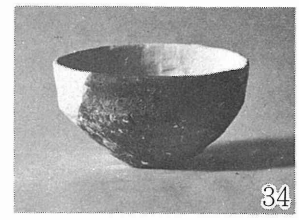
30

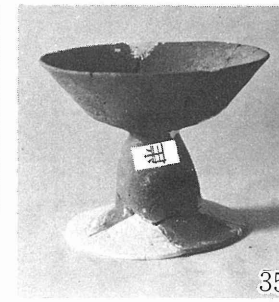

31

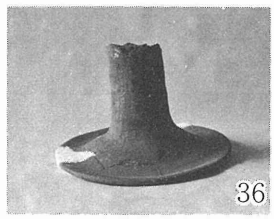
32

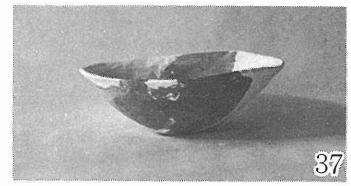
図版 7


33

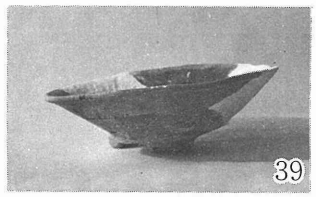

34

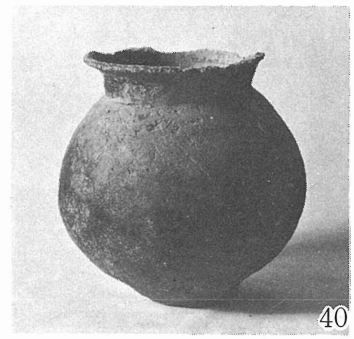

35

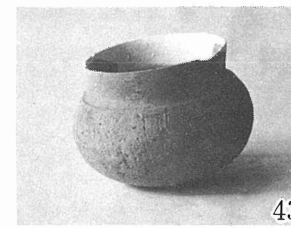

36


37

38

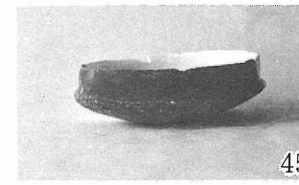

39


40

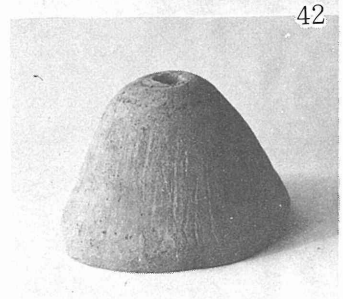

43

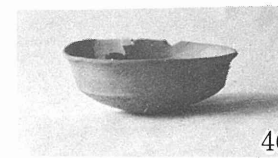
41

42

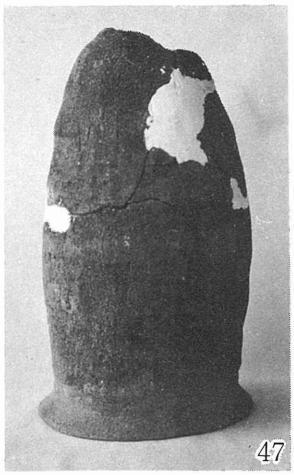

45

44



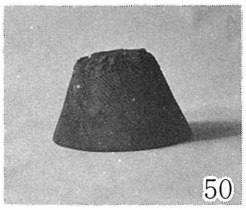

46

図版 8


47

48

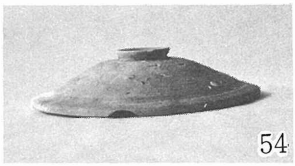
49

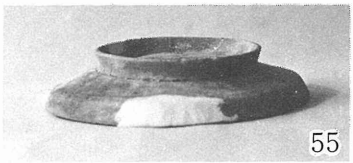

50

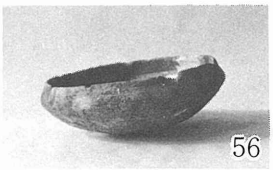
51

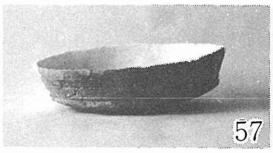
52

53


54


55


56


57

58

59

110
201
6